

食肉販売動向調査結果 (2020年度下半期)

2020年11月

独立行政法人農畜産業振興機構

※ 本調査結果は当機構の見解ではなく、当機構が定期的に調査を実施している主要な食肉の卸売業者および小売業者（全ての業者ではない）を対象としたアンケート調査の回答をとりまとめたものである。

【ポイント】（2020年8月現在）

新型コロナウイルス感染症（以下「COVID-19」という）の影響下における食肉販売状況

○2020年上半期（実績）は、COVID-19が食肉の販売に与えた影響が調査回答に反映された。

○卸売業者における販売状況は、外出自粛により、全ての食肉で外食向けや集団給食および食肉加工業者向けが減少した。一方、内食需要の高まりから和牛の4,5等級を含む全ての食肉で量販店・食肉専門店向けは増加した。

販売見通しでは、「引き続き量販店向けを強化していく」といった声が挙げられ、和牛の4,5等級についても「量販店向けを増加させる」といった声が挙がった。一方、輸入牛肉については、外食需要の減少などにより同程度もしくは減少傾向との結果となった。

○小売業者における販売状況は、COVID-19の影響により内食需要を取り込み全ての食肉で販売量がおおむね増加した。

特に和牛は、仕入れ価格の低下や内食需要の高まりから、量販店における販売量が増加する見込みとの声大きい。また、消費者の低価格志向への対応のために、国産鶏肉や国産豚肉を増やしていくとの声もあり、今後の販売見通しとしては、食肉全体で増加の見方が多い。

調査概要

当機構では、食肉の消費・販売動向を把握するため、年に2回、卸売業者や小売業者（量販店および食肉専門店）の協力を得て、食肉の取り扱いや販売見通しに関するアンケート調査を実施している。

今回は、2020年度上半期（2020年4月～9月）の実績および2020年度下半期（2020年10月～2021年3月）の見通しについて調査を行った（2020年8月時点）。

調査対象期間および調査期間は、COVID-19の影響下にあり、通常の傾向と異なる傾向となっている。

概要は以下の通りである。

（参考）調査対象者と回収数

調査対象者と回収率

（単位：者）

1. 調査方法

アンケート調査

2. 調査対象者と回収率

右表の通り

3. 調査期間

2020年7月28日～8月17日

	調査対象者数①	回収数②	回収率 (%) ③ = ②/①
卸売業者			
牛肉	15	15	100
豚肉	13	13	100
小売業者			
量販店	20	20	100
食肉専門店	63	63	100

注：調査対象者は、食肉の市況（仲間相場）や小売価格について、当機構が定期的に調査を実施している主要な食肉の卸売業者および小売業者であり、全ての業者ではない。

I 卸売業者

牛肉

- 1 食肉の取扱状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1頁
- 2 仕向け先別販売割合・取扱状況・・・・・・・・・・・・ 2～3頁
- 3 和牛の等級別取扱割合・販売見通し・・・・・・・・・・ 4～5頁
- 4 食肉の部位別販売見通し・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6頁
- 5 輸入食肉の取扱割合・取扱見通し・・・・・・・・・・・・ 7頁

豚肉

- 6 食肉の取扱状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8頁
- 7 仕向け先別販売割合い・取扱状況・・・・・・・・・・・・ 9～10頁
- 8 食肉の部位別販売見通し・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11頁
- 9 輸入食肉の取扱割合・取扱見通し・・・・・・・・・・・・ 12頁

II 小売業者（食肉専門店・量販店）

- 1 食肉の取扱割合・販売見通し・・・・・・・・・・・・・・ 13～16頁
- 2 和牛の等級別取扱割合・販売見通し・・・・・・・・・・ 17～18頁
- 3 食肉の小売価格・見通し・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19頁
- 4 和牛の特売価格・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20頁
- 5 食肉の販売拡大に向けた対応・・・・・・・・・・・・・・ 21～22頁
- 6 輸入食肉の取扱割合・販売見通し（量販店）・・・・ 23～25頁

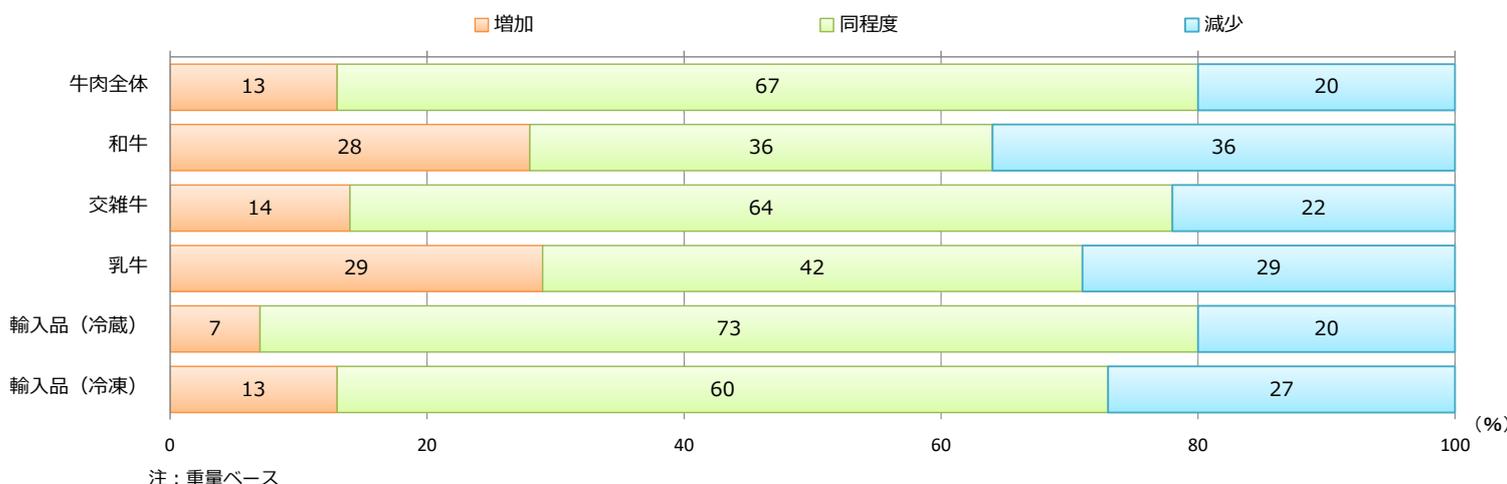
牛肉全体の取扱状況

～国産品・輸入品ともにおおむね同程度～

○2020年度上半期は新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）の影響を受けたとみられているが、卸売業者における牛肉全体の取扱状況（重量ベース）は、COVID-19の影響を受ける前（2019年度下半期）との比較では「同程度」の回答が多く、COVID-19の影響によって取扱状況は大きく変わらない結果となった。

○品種別に増減結果をみると、**乳牛を除く全ての食肉で「減少」が「増加」を上回る結果となった**。減少理由は全ての牛肉で「**外食向け需要の減少**」が最も多かった。一方、和牛および乳牛の増加理由は「**小売向け需要の増加**」、交雑牛は「**相場安**」がそれぞれ最も多く、販売先の変化と仕入れ価格が増減に影響したことがうかがえる。

2020年度上半期における牛肉の取扱状況（2019年度下半期との比較）



和牛の等級別取扱状況

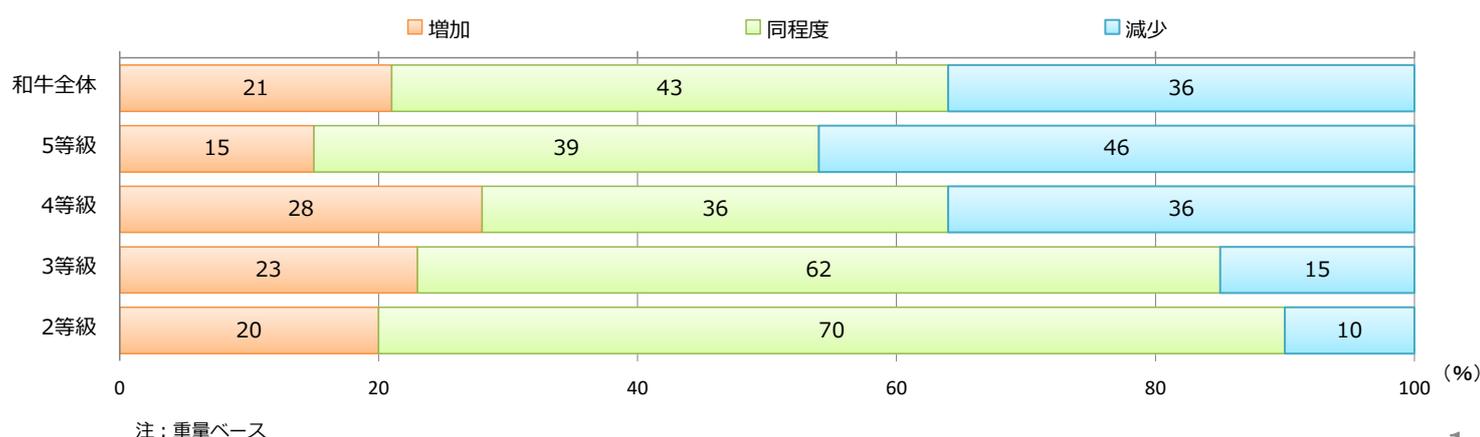
～上位等級では減少、下位等級では増加が多い～

○和牛は外食需要の減少を顕著に受けたとみられ、緊急事態宣言後の等級別の取扱状況（重量ベース）については、**5等級は「減少」が最も多く、4等級は「同程度」および「減少した」が最も多かった**。また、**2等級、3等級は「同程度」が最も多かった**。

○減少理由については、5等級は「**インバウンド需要の減少**」が最も多く、次いで「**外出の自粛**」、4等級は「**インバウンド需要の減少**」および「**外出の自粛**」が最も多かった。

○増加理由として、2等級、3等級では「**消費者の低価格志向**」、4等級、5等級では「**相場安**」が挙げられた。

等級別にみた和牛の取扱状況（卸売業者）

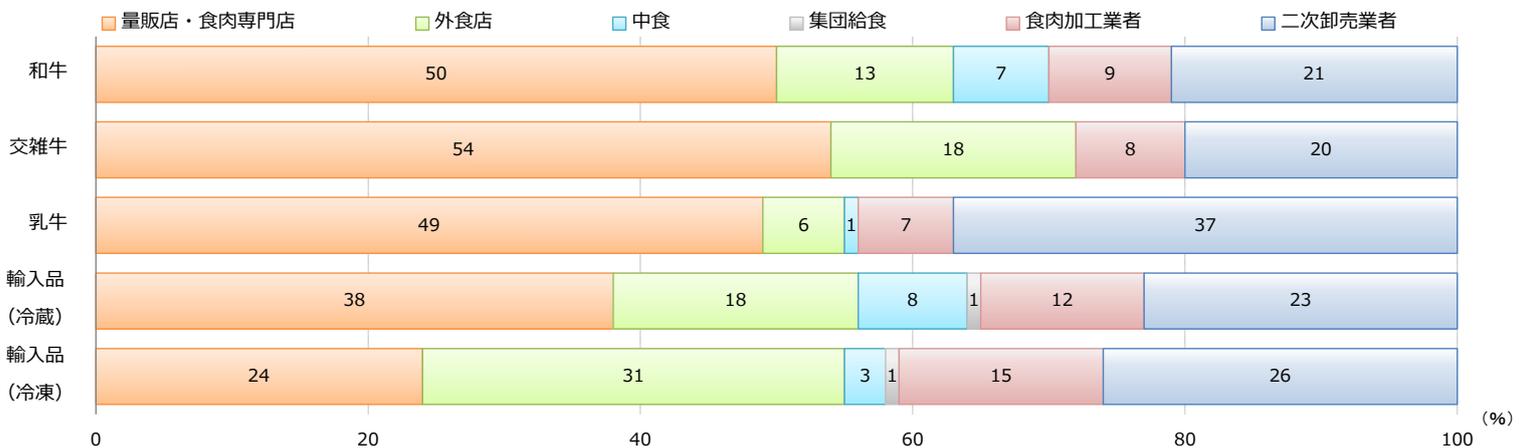


仕向け先別販売割合（牛肉）

～国産品は小売向けが多い～

- 2020年度上半期の卸売業者における牛肉の仕向け先別販売割合の実績（重量ベース）を見ると、**全ての牛肉で「量販店・食肉専門店」向けの仕向け割合が2019年度上半期と比べて増加した。**
- 2019年度上半期は和牛の「量販店・食肉専門店」向けの仕向け割合は5割未満であったが今期は約5割に増加した。さらに今期「二次卸売業者」の最終仕向け先を調査したところ「量販店・食肉専門店」が最も多い結果となったことから、これらを加味すると**和牛の「量販店・食肉専門店」向けの仕向け割合は約6割**となった。**COVID-19の影響による内食需要の高まりから、家庭用に仕向けられる割合が高くなっている**ことがうかがえる。
- 従来から、量販店における和牛の取扱は3,4等級が約8割を占め（17ページ）、和牛の中でも比較的安価なものの大部分が量販店に仕向けられ、外食店へは5等級を中心に仕向けられる傾向があったが、今期は量販店における4,5等級の取扱が2019年度上半期と比較して増加していることから、COVID-19の影響により、**主に外食向けに仕向けられていた和牛の上位等級の一部が小売店へ仕向けられた**とみられる。
- 交雑牛および乳牛についても「二次卸売業者」の最終仕向け先を加味すると「量販店・食肉専門店」が約6割と最も多い結果となった。
- 輸入品（冷蔵）は「二次卸売業者」の最終仕向け先を加味すると「量販店・食肉専門店」が約5割と最も多かった一方で、輸入品（冷凍）は「外食店」が約4割と最も多かったことから、輸入品（冷凍）は業務向けの利用が中心となっているとみられる。
- 輸入品（冷凍）の「外食店」の内訳は焼き肉店およびファミリーレストランの計が約6割を占める。

2020年度上半期の仕向け先別販売割合（牛肉）



<参考> 二次卸売業者の最終仕向け先



<参考> 外食店の内訳



注：データは、各者の仕向け先別販売割合（重量ベース）であり、加重平均ではない。

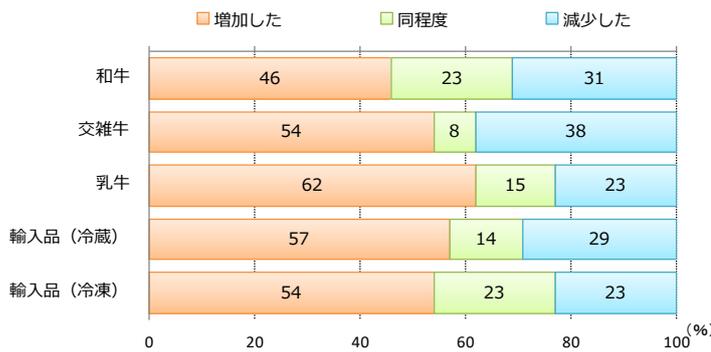
仕向け先別取扱状況（牛肉）

～量販店・食肉専門店は「増加」～

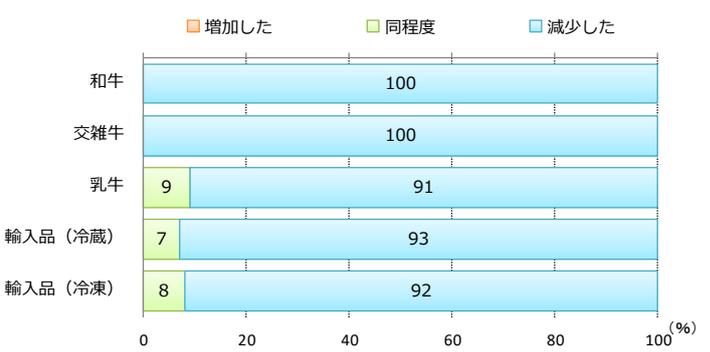
- 2020年度上半期の牛肉の仕向け先別の取扱状況（重量ベース）についてCOVID-19の影響を受ける前（2019年度下半期）と比較すると、**量販店・食肉専門店では全ての牛肉で「増加した」が最も多かった。**増加理由として「小売向け需要が高まる中、価格が下がったことで消費者の低価格志向も一層強まった」などが挙げられた。
- 外食店では全ての牛肉で「減少した」が最も多かった。**減少理由として「COVID-19の影響により外食店向けの販売が減少した。」などが挙げられた。
- 中食では、和牛、交雑牛、乳牛で「増加した」の回答はなかった。輸入品（冷蔵）は「同程度」が最も多く、輸入品（冷凍）は「増加した」および「減少した」がそれぞれ最も多かった。**増加理由として「外食向けの需要が減少する中、量販店・中食向け数量は増えた」などが挙げられた。
- 集団給食、食肉加工業者では「減少」が最も多く、**国産品よりも輸入品の減少傾向が顕著となっている。減少理由として「給食関係は全国の学校で休校になった事で消費が一気に落ち込み在庫過多になった」などが挙げられた。

仕向け先別取扱状況（牛肉）

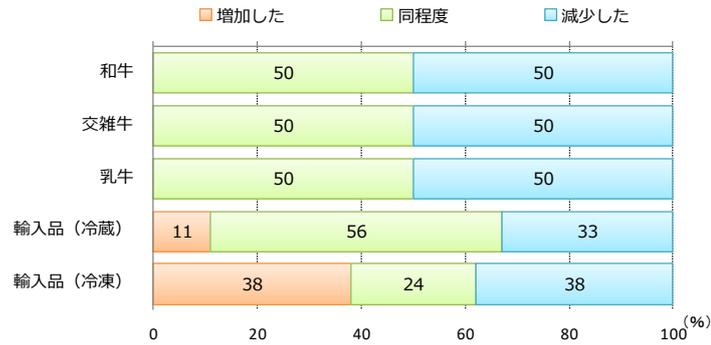
<量販店・食肉専門店>



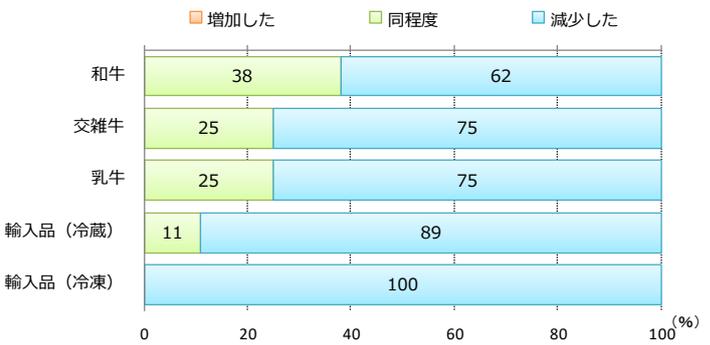
<外食店>



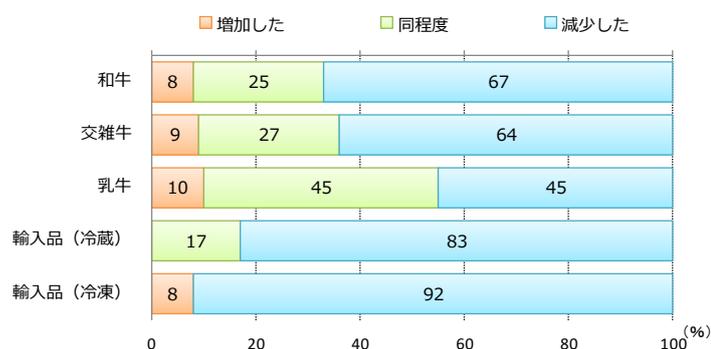
<中食>



<集団給食>



<食肉加工業者>

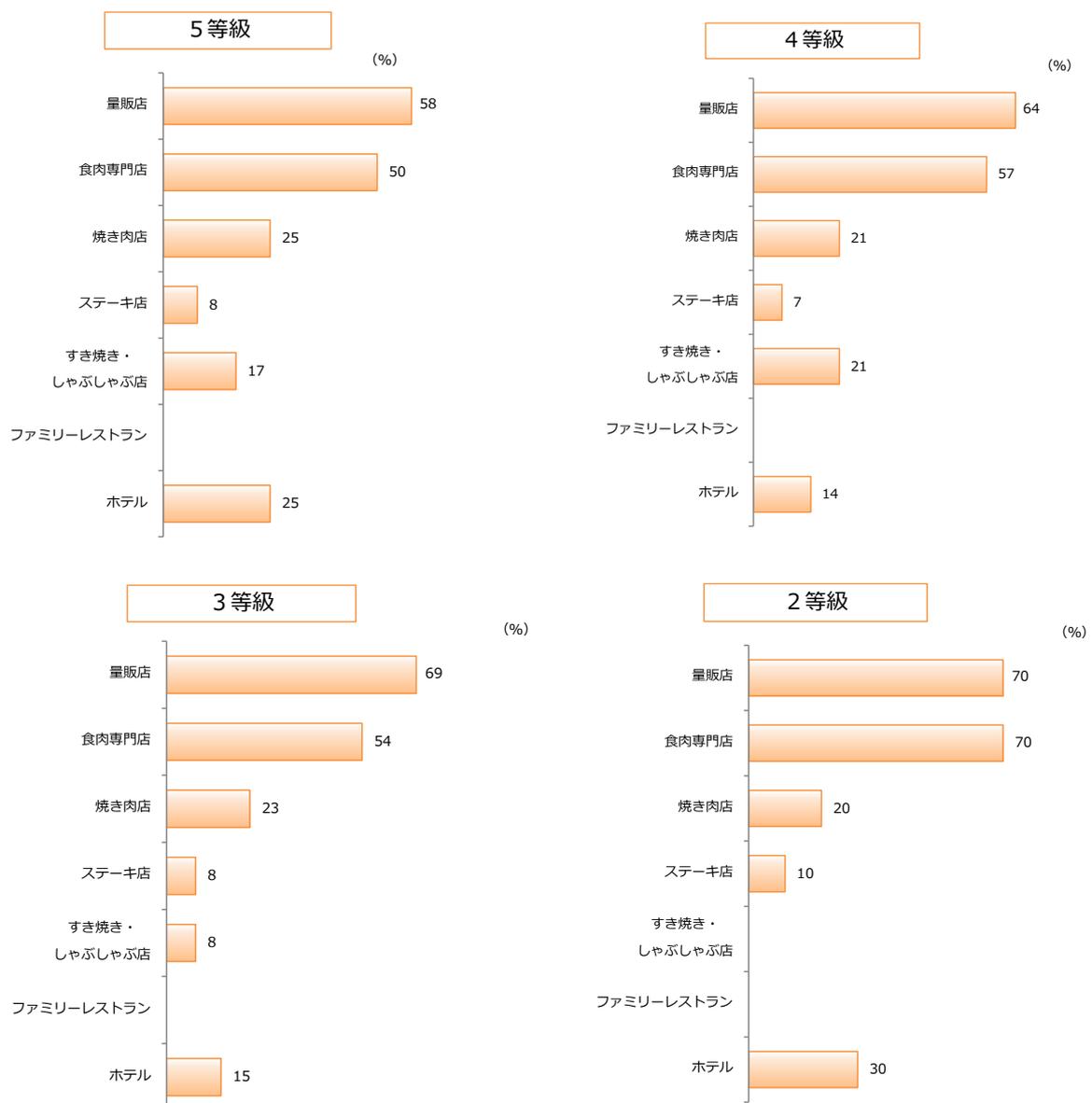


注：重量ベース

和牛の等級別の主な販売先 ～ 全ての等級で「量販店」および「食肉専門店」が多い～

- 卸売業者における和牛の等級別の主な販売先（件数ベース）については、**3等級、4等級および5等級を取扱う者のうち、「量販店」へ仕向けるとの回答が最も多く、次いで、「食肉専門店」となった。**2等級では「量販店」および「食肉専門店」が同数となった。
- COVID-19の影響を受ける前（2019年度下半期）と比較すると、2020年度上半期は5等級と4等級では「量販店」「食肉専門店」へ仕向けると回答した者が大きく増加していることから、仕入れ価格の低下や内食需要の高まりを背景に、通常テーブルミートに出回りにくい上位等級が小売店に出回ったとみられる。
- また、3等級および2等級では2019年度下半期と比較して、「食肉専門店」へ仕向けると回答した者が大きく増加した。

和牛の等級別の主な販売先（卸売業者）

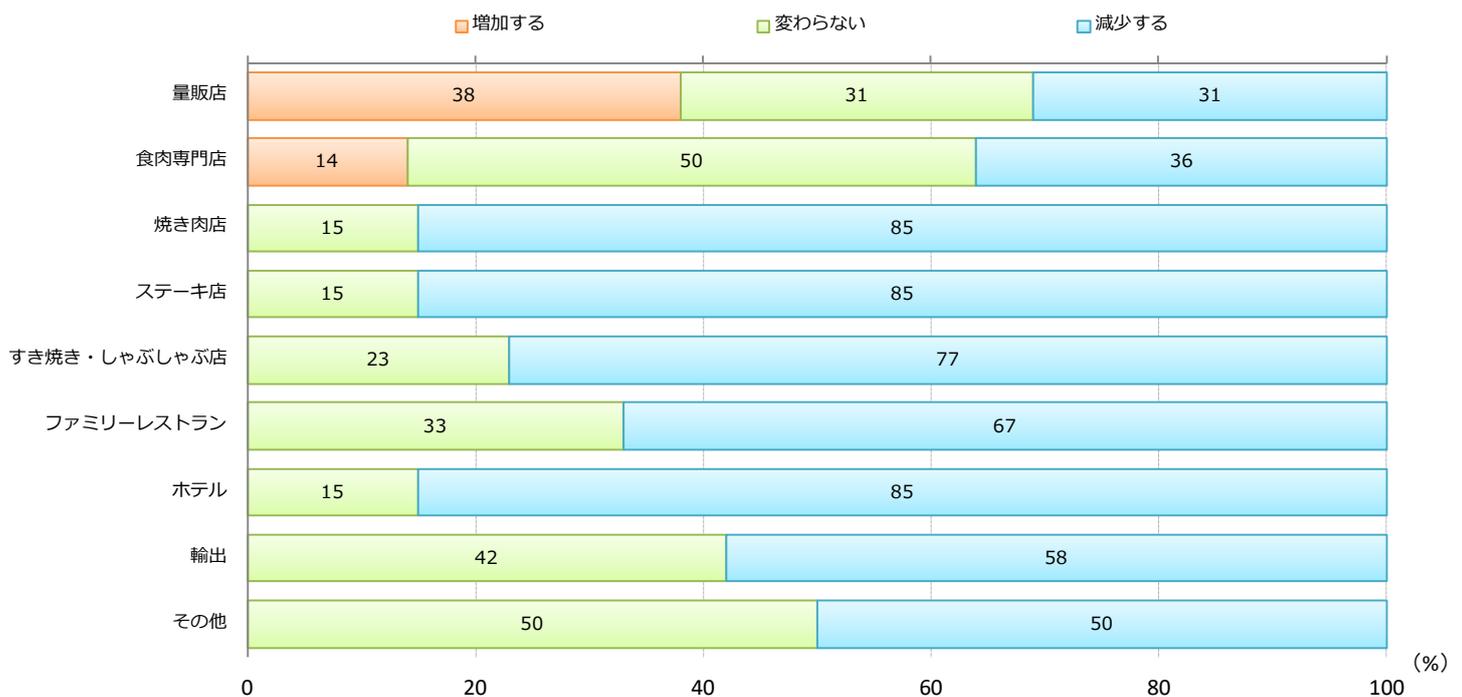


注：各等級の取扱いがある者に占める各販売先へ販売した者の割合（複数回答）

和牛（4,5等級）の販売先別販売見通し ～量販店向けの仕向けが増加～

- 2020年度下半期の卸売業者における和牛（4,5等級）の販売先別販売見通し（重量ベース）については、**量販店向けを「増加する」が最も多い**。また、食肉専門店は「変わらない」が最も多く、それ以外ではその他を除いて「減少」が最も多くなっている。小売店以外は「増加する」の回答はなかった。
- 量販店の増加理由として「外出の自粛」が多く挙げられた。また、焼き肉店、ステーキ店、すき焼き・しゃぶしゃぶ店、ファミリーレストラン、ホテルの減少理由として「インバウンド需要の減少」および「外出の自粛」が多く挙げられた。輸出の減少理由としては「海外におけるCOVID-19の影響」などが挙げられた。

2020年度下半期の和牛（4,5等級）の販売先別販売見通し（卸売業者）



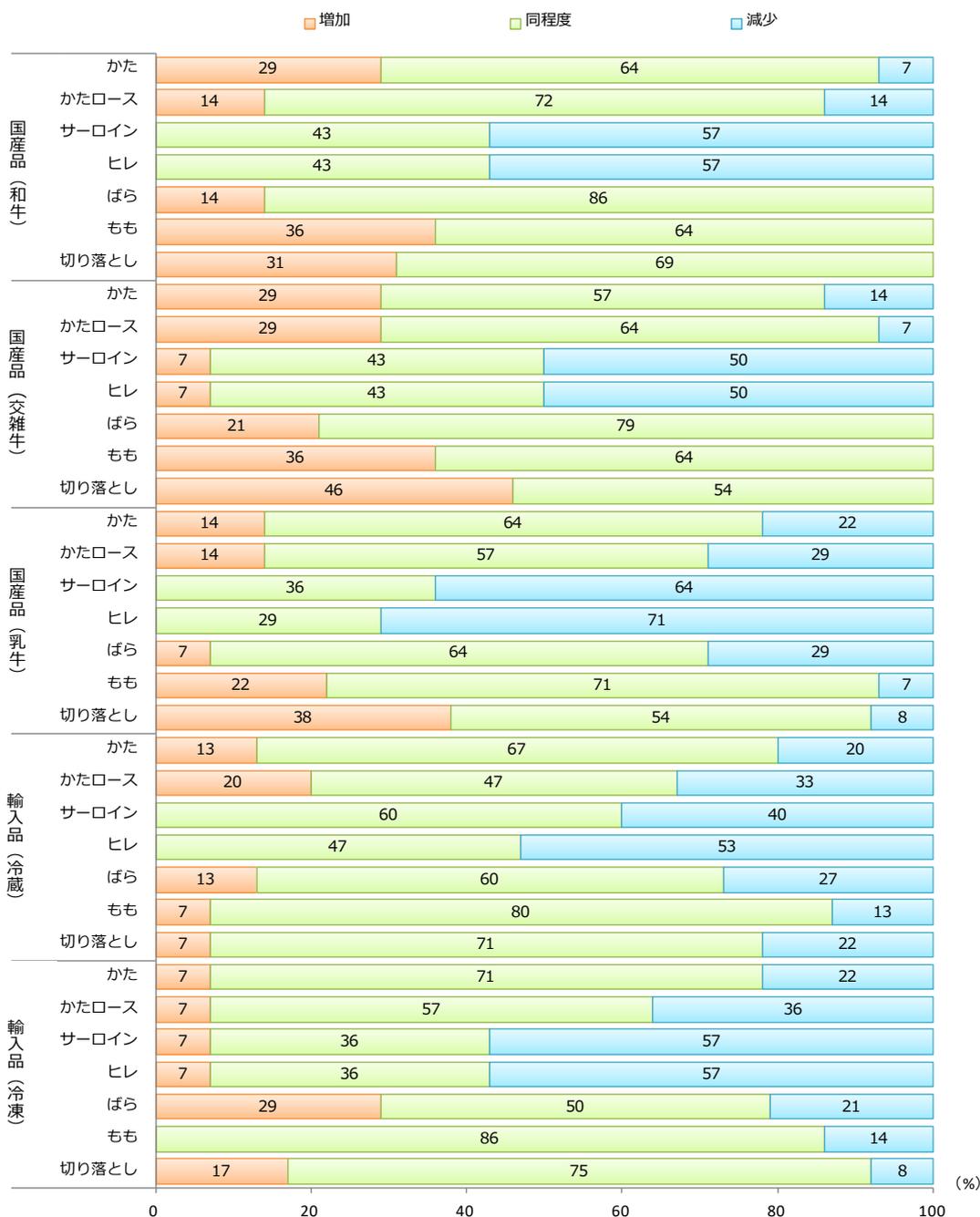
注：重量ベース

部位別販売見通し（牛肉）

～国産品・輸入品ともに「サーロイン」「ヒレ」を中心に減少～

- 2019年度下半期と比較した2020年度下半期の卸売業者における牛肉の部位別販売見通し（重量ベース）については、**和牛、交雑牛、乳牛いずれも「サーロイン」および「ヒレ」において「減少」が最も多かった。**減少理由として「COVID-19の影響により外食需要が減少するため」、特に和牛では「輸出向けの減少」などが挙げられた。
- 輸入品のうち、冷蔵では「ヒレ」において「減少」が最も多かった。**減少理由として「COVID-19の影響により輸出国からの供給が減少するため」や「COVID-19の影響により外食需要が減少するため」などが挙げられた。
- 冷凍では「サーロイン」および「ヒレ」において「減少」が最も多かった。**減少理由として「COVID-19の影響により外食需要が減少するため」などが挙げられた。

2020年度下半期の牛肉の部位別販売見通し



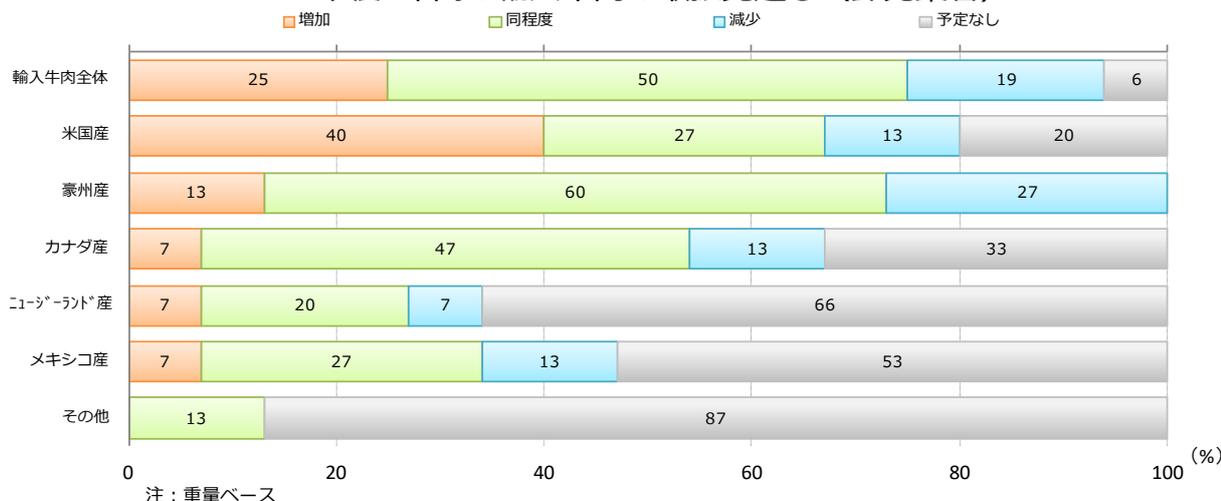
注：重量ベース

輸入牛肉の取扱見通し

～米国産では「増加」が最も多い見通し～

- 今後1年間の卸売業者における輸入牛肉の取扱見通し（重量ベース）については、**輸入牛肉全体では同程度が最も多い中、「増加」が「減少」を上回った。**
- 国別に見ると、**米国産は「増加」が40%と最も多かった。**一方、豪州産は「同程度」が60%と最も多く、次いで、「減少」が27%となった。
- ニュージーランド産、メキシコ産については「予定なし」が最も多かった。
- 米国産の増加理由として「価格が安価で、生産が安定しているため」、「米国産の品質に対して安定した支持を得ている」などが挙げられた。

今後1年間の輸入牛肉の取扱見通し（卸売業者）

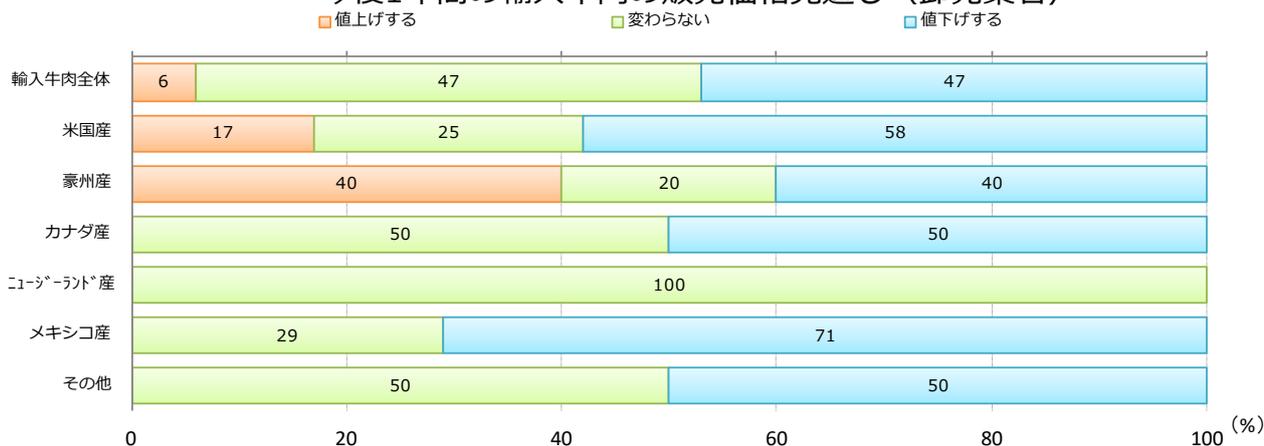


輸入牛肉の販売価格見通し

～「値下げ」が多い見通し～

- 今後1年間の卸売業者における輸入牛肉の販売価格見通しについては、**輸入牛肉全体では「変わらない」および「値下げする」が47%とそれぞれ最も多かった。**
- 国別に見ると、米国産およびメキシコ産では「値下げする」が最も多かった。また、豪州産では「値上げする」と「値下げする」がそれぞれ40%となっている。
- 米国産の値下げ要因として「消費者の低価格志向」、「供給過剰」などが挙げられた。また、豪州産の値上げ理由として「供給量低下に伴う現地価格上昇」などが挙げられた。一方、値下げ要因として「消費者の低価格志向」、「COVID-19による需要減」など需要側の要因が挙げられた。

今後1年間の輸入牛肉の販売価格見通し（卸売業者）



豚肉全体の取扱状況

～輸入品は冷蔵・冷凍でそれぞれ減少～

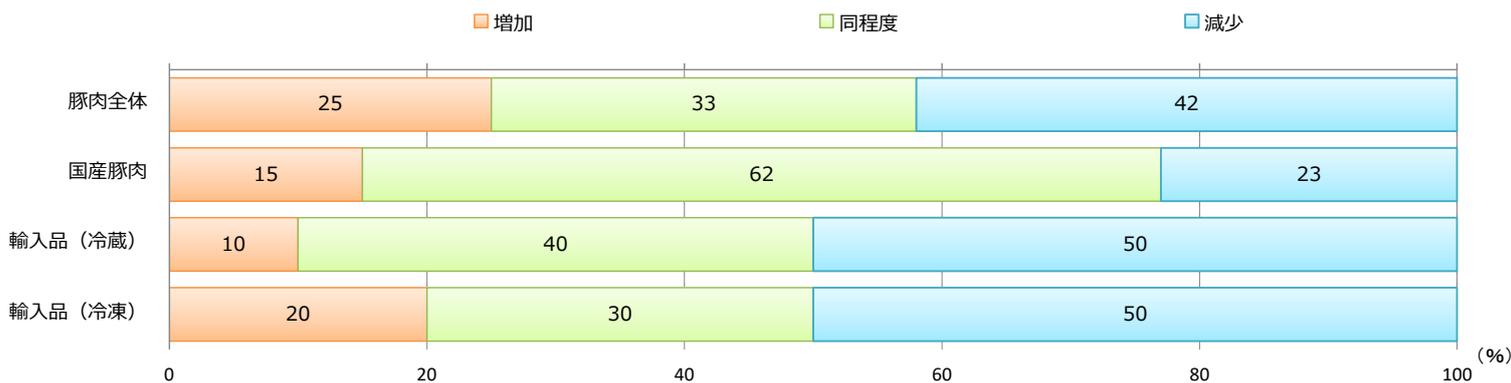
○COVID-19の影響を受ける前（2019年度下半期）と比較した2020年度上半期の卸売業者における豚肉の取扱状況（重量ベース）は、**国産豚肉では「同程度」が最も多く、輸入品（冷蔵）および輸入品（冷凍）では「減少」が最も多かった。**

○減少理由は全ての豚肉で「外食向け需要の減少」が最も多かった。また、輸入品（冷蔵）、輸入品（冷凍）では「輸入先国におけるCOVID-19の拡大」とのコメントも挙げられた。

○増加理由は全ての豚肉で「小売向け需要の増加」が最も多かった。

○外出自粛による量販店向けが好調であったことから、国産豚肉は豚肉全体と比較して「減少」が少なかった。一方、量販店において国産品と競合する輸入品（冷蔵）は、輸入先国からの供給量の減少も影響し、外食向けが多い輸入品（冷凍）は、外食需要の減退などから、約半数が減少した。

2020年度上半期における豚肉の取扱状況（2019年度下半期との比較）



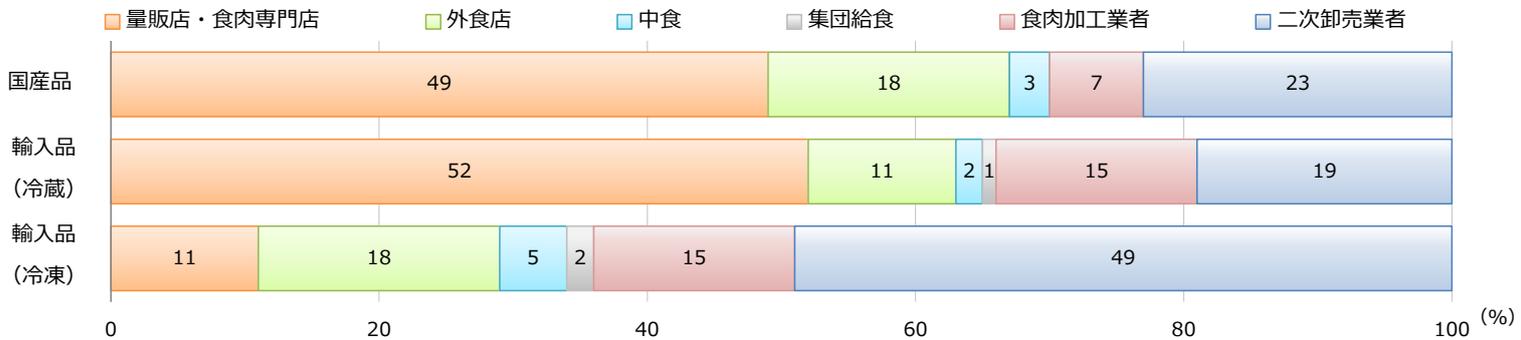
注：重量ベース

仕向け先別販売割合（豚肉）

～国産品、輸入品（冷蔵）はテーブルミートとしての需要が高い～

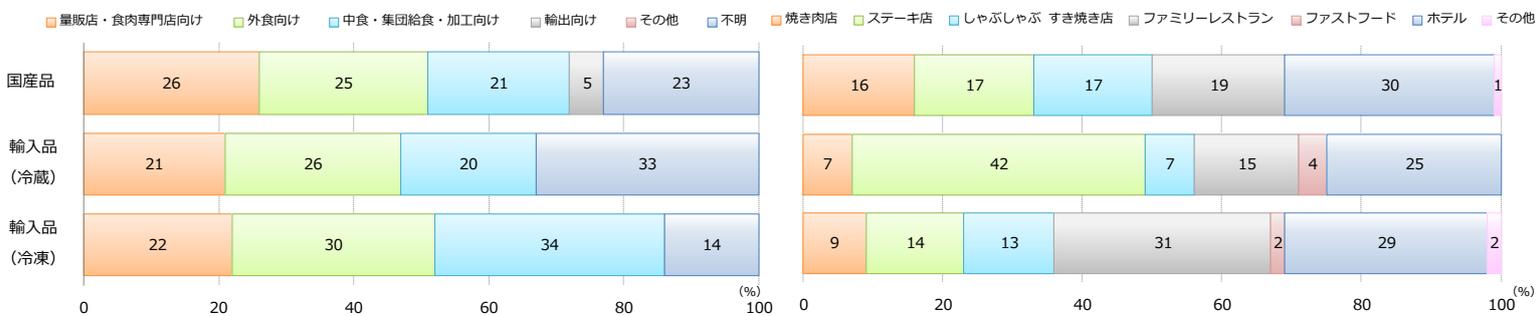
- 2020年度上半期の卸売業者における豚肉の仕向け先別販売割合の実績（重量ベース）を見ると、**国産品および輸入品（冷蔵）は「量販店・食肉専門店」が最も多く、約半数を占めていることから、テーブルミートとしての需要が高いことがうかがえる。**
- 2019年度上半期と比較した「量販店・食肉専門店」への仕向け割合をみると「二次卸売業者」の最終仕向け先を加味すると国産品と輸入品（冷蔵）は大きく増減していない一方、輸入品（冷凍）は10ポイント増加する結果となった。これは、**COVID-19の影響で輸入先の冷蔵品生産が減少したことで冷凍品の取扱が増加した**ことが背景にあるとみられる。
- 輸入品（冷凍）は「二次卸売業者」が約5割と最も多いが「二次卸売業者」の最終仕向け先を加味すると、中食・集団給食・加工向けが全体の約4割、外食店が約3割を占めることがわかる。
- 「二次卸売業者」に販売された豚肉の最終仕向け先は、**輸入品（冷凍）の約6割、国産・輸入品（冷蔵）の約5割が外食店および中食・集団給食・加工の業務向け**となっている。
- 「外食店」の内訳を見ると、国産品はホテル、輸入品（冷蔵）はステーキ店、輸入品（冷凍）はファミリーレストランが最も多かった。
- また、2019年度上半期と比較すると、全ての豚肉で「集団給食」が減少しており、**COVID-19の影響による学校給食の停止等**の影響がうかがえた。

2020年度上半期の仕向け先別販売割合（豚肉）



<参考> 二次卸売業者の最終仕向け先

<参考> 外食店の内訳



注：データは、各者の仕向け先別販売割合（重量ベース）であり、加重平均ではない。

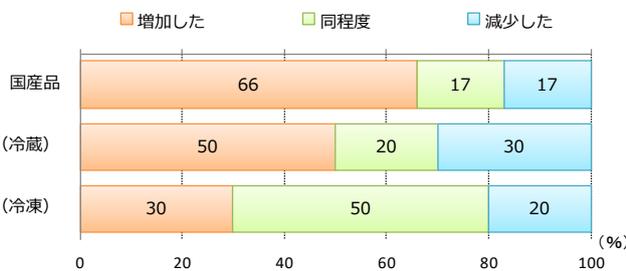
仕向け先別取扱状況（豚肉）

～量販店・食肉専門店は「増加」～

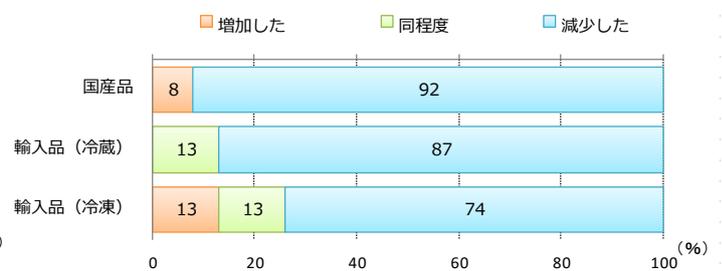
- 2020年度上半期の豚肉の仕向け先別の取扱状況（重量ベース）についてCOVID-19の影響を受ける前（2019年度下半期）と比較すると、**量販店・食肉専門店では国産品と輸入品（冷蔵）で「増加した」が最も多かった。**増加理由として「緊急事態宣言以降、量販店への販売数量は一律向上した」が挙げられ、内食需要やまとめ買い需要に対応するために、かねてよりテーブルミート向けとして取扱の多い国産品と輸入品（冷蔵）が増加したとみられる。一方で、輸入品（冷凍）は「同程度」が最も多かった。
- 外食店では全ての豚肉で「減少した」が最も多かった。**減少理由として「COVID-19の影響により外食店向けの販売が減少した」などが挙げられた。
- 中食では輸入品（冷蔵）で「同程度」が最も多く、国産および輸入品（冷凍）は「同程度」と「減少した」が同水準になった。**減少理由として「COVID-19の影響により販売が減少した」が挙げられた。
- 集団給食では輸入品（冷凍）を除いて「減少」が最も多く、食肉加工業者では全ての豚肉で「減少」が最も多かった。**減少理由として「COVID-19の影響により販売が減少した」が挙げられた。
- 外食店・中食・集団給食・食肉加工業者の、国産品、輸入品（冷凍）の増加理由としては「輸出国におけるCOVID-19拡大の影響による輸入品（冷蔵）の供給減を補うため」が挙げられた。

仕向け先別の取扱状況（豚肉）

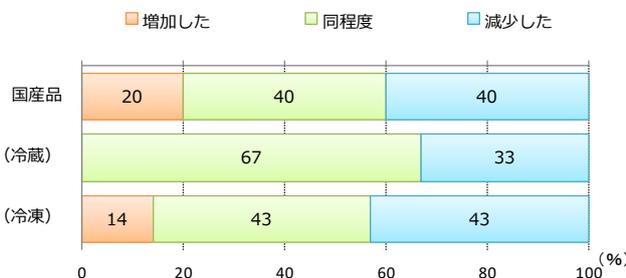
<量販店・食肉専門店>



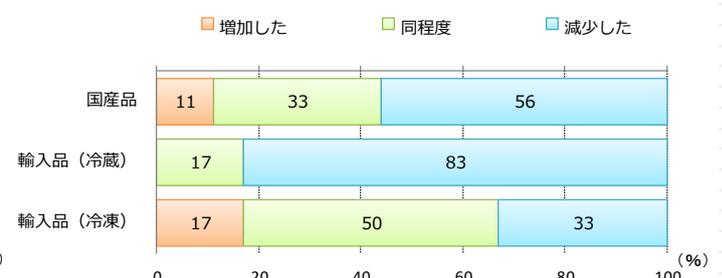
<外食店>



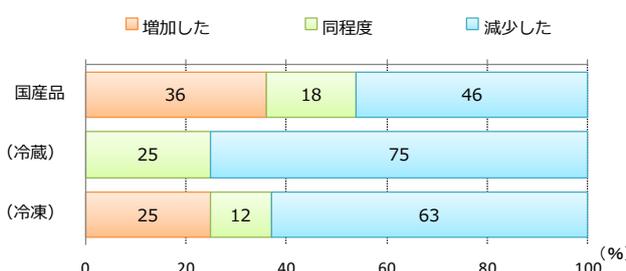
<中食>



<集団給食>



<食肉加工業者>



注：重量ベース

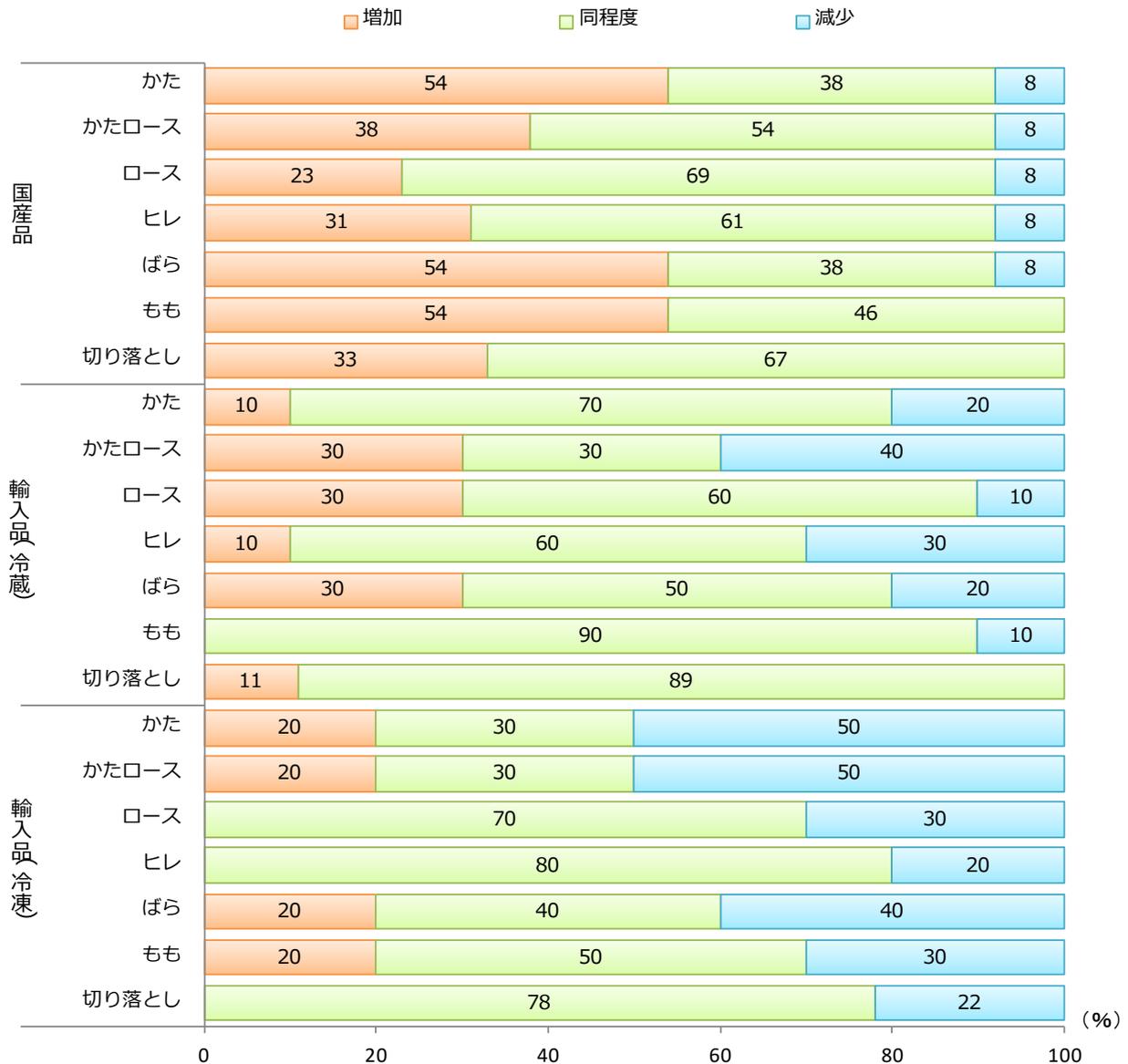
部位別販売見通し（豚肉）

～ 国産品はロイン系以外の部位で増加が多い～

○2019年度下半期と比較した2020年度下半期の卸売業者における豚肉の部位別販売見通し（重量ベース）については、**国産品では全ての部位において「増加」が「減少」を上回り、「かた」、「ばら」、「もも」などロイン系以外の部位において「増加」が最も多かった。**増加理由として「量販店向けで特売や定番で販促をかけやすい部位の増加を見込む」、「安価に提供できる量販店向けのキット商材が支持されている」などが挙げられた。

○**輸入品は、冷蔵では「かたロース」において「減少」が最も多く、冷凍では「かた」、「かたロース」において「減少」が最も多かったものの、それ以外の部位においては冷蔵、冷凍ともに「同程度」が多かった。**減少理由として「COVID-19の影響による供給面の不安」、「外食需要の減少」などが挙げられた。

2020年度下半期の豚肉の部位別販売見通し

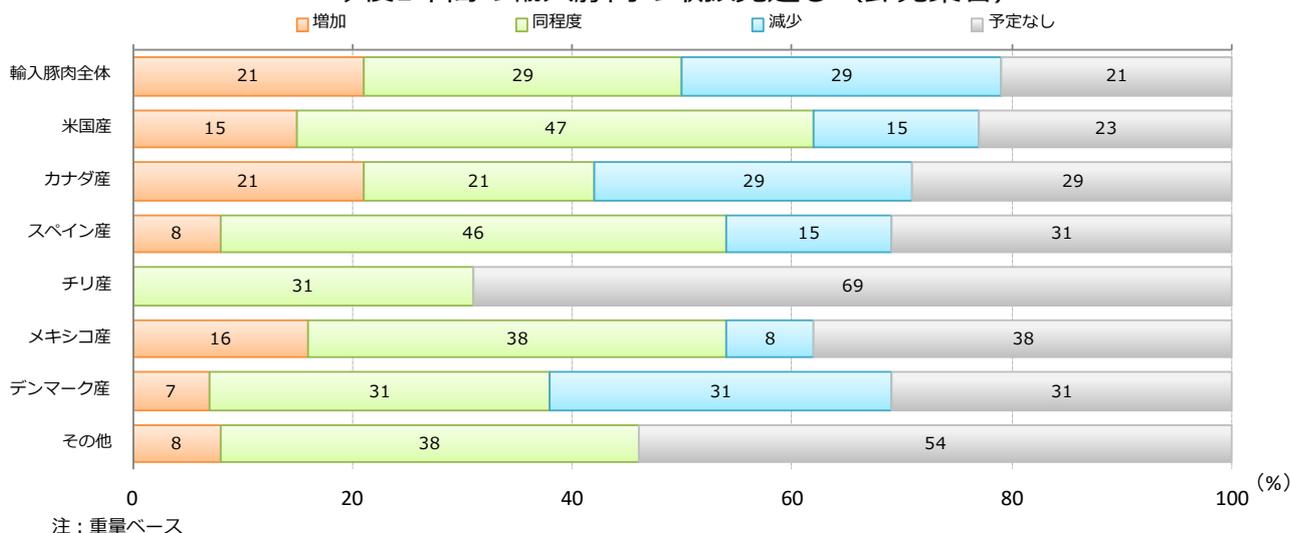


注：重量ベース

輸入豚肉の取扱見通し ～カナダ産は「減少」が最も多い見通し～

- 今後1年間の卸売業者における輸入豚肉の取扱見通し（重量ベース）については、**輸入豚肉全体では「同程度」および「減少」が29%と同数となり**、「増加」が21%となった。
- 国別に見ると、カナダ産で「減少」が多くなった一方、デンマーク産は「同程度」および「減少」が同水準であった。
- 減少理由としてカナダ産は「COVID-19による現地供給面の懸念」、デンマーク産は「中国の買付けによるデンマークにおける現地価格高騰の懸念」などが挙げられた。

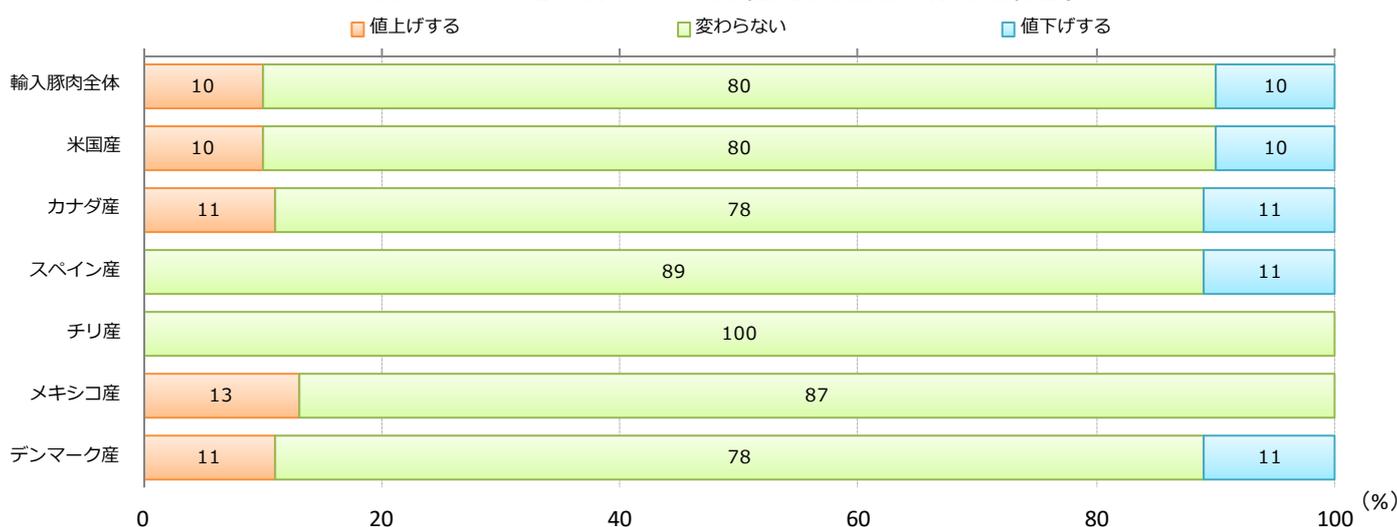
今後1年間の輸入豚肉の取扱見通し（卸売業者）



輸入豚肉の販売価格見通し ～おおむね「変わらない」が最も多い見通し～

- 今後1年間の卸売業者における輸入豚肉の販売価格見通しについては、**概して「変わらない」という回答であった**。
- 変わらない理由として、「安定価格で提供したいため」や「輸入先国における現地価格に大きな変化要因がない」などの声が挙げられた。
- 「値上げする」の理由としては、「COVID-19による、国内外における流通コストの上昇を回収するため」という声がある一方で、「値下げする」の理由としては「価格競争激化への対応」などが挙げられた。

今後1年間の輸入豚肉の販売価格見通し（卸売業者）

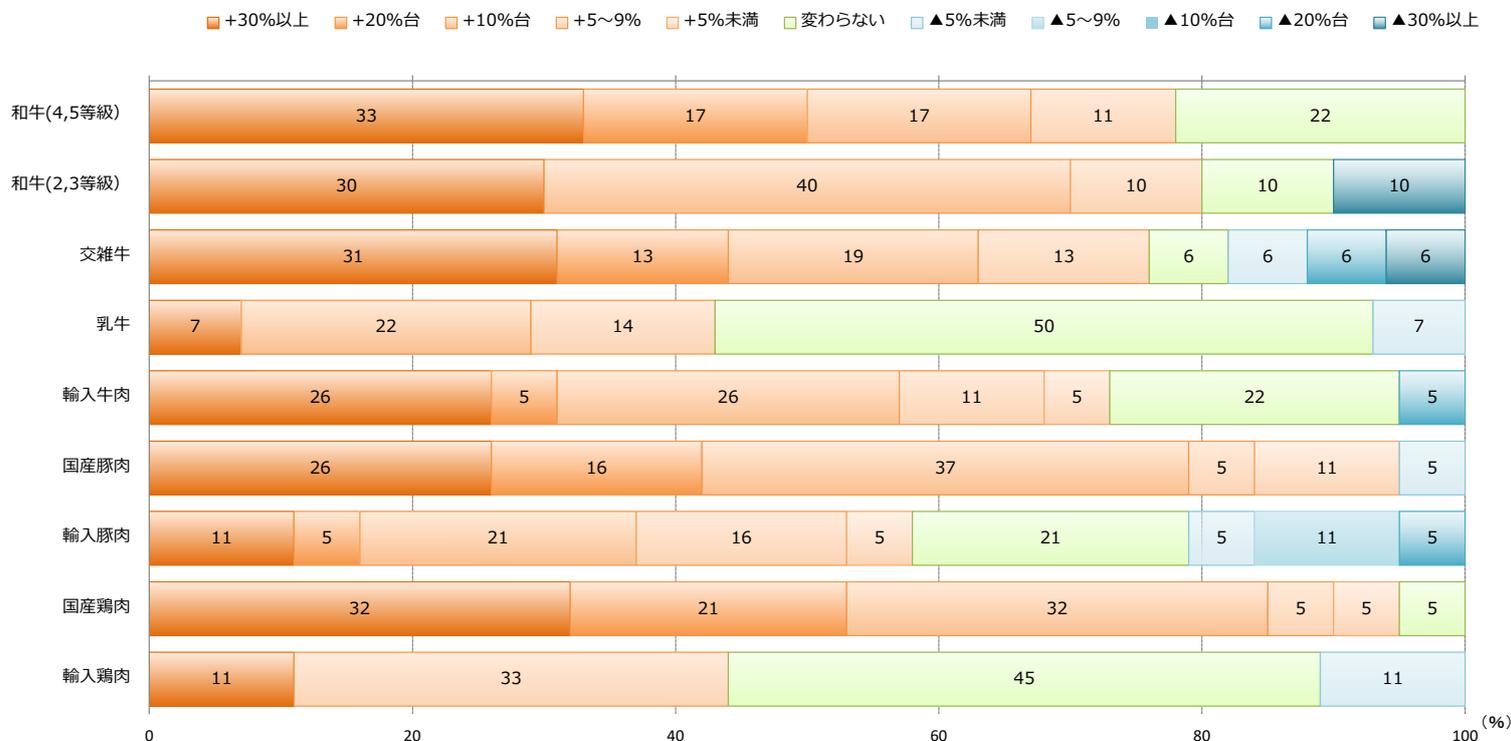


販売量の増減割合（量販店）

～販売量は総じて増加～

- COVID-19の影響を受ける前（2019年度下半期）と比較した2020年度上半期の量販店における食肉販売量の増減割合は、**全ての食肉で「増加」が「減少」を上回る結果となった。**
- 特に、**国産豚肉、国産鶏肉は95%、和牛（2,3等級）は80%、和牛（4,5等級）では78%、交雑牛、輸入牛肉は75%が「増加した」と回答した。**
- 品種別の増加割合をみると、和牛（4,5等級）および交雑牛で「+30%以上」、和牛（2,3等級）および国産豚肉で「+10%台」が最も多かった。**また、輸入牛肉は「+10%台」および「+30%以上」が最も多かった。
- 国産牛肉の増加理由については「内食需要の増加」、「仕入れ価格低下による販促を実施した」に加え、和牛（4,5等級）では「産地応援セール実施」、和牛（2,3等級）では「低価格商品の販促強化」などが挙げられた。これらのことから、**COVID-19の影響による内食需要の増加に加え、仕入れ価格の低下が、量販店における和牛の取扱いを押し上げている状況がうかがえる。**
- 国産豚肉、国産鶏肉の増加理由については、「内食需要の増加」、「低価格商材の需要増」、「まとめ買い需要」などが挙げられた。
- 乳牛、輸入鶏肉は「変わらない」が最も多かった。

販売量の増減割合（量販店）



販売量の増減割合（食肉専門店）

～国産食肉で「増加した」が多い～

○COVID-19の影響を受ける前（2019年度下半期）と比較した2020年上半期の食肉専門店における食肉販売量の増減割合は、**和牛（4,5等級）、和牛（2,3等級）、交雑牛で「増加した」が最も多かった**。それ以外の食肉では「変わらない」が最も多かった。また、量販店と比較して「増加」が少なかった。

○品目別の増加割合をみると交雑牛、乳牛、輸入牛肉が「+30%以上」、和牛（4,5等級）が「+10%台」、国産豚肉、国産鶏肉が「+5～9%」が多かった。

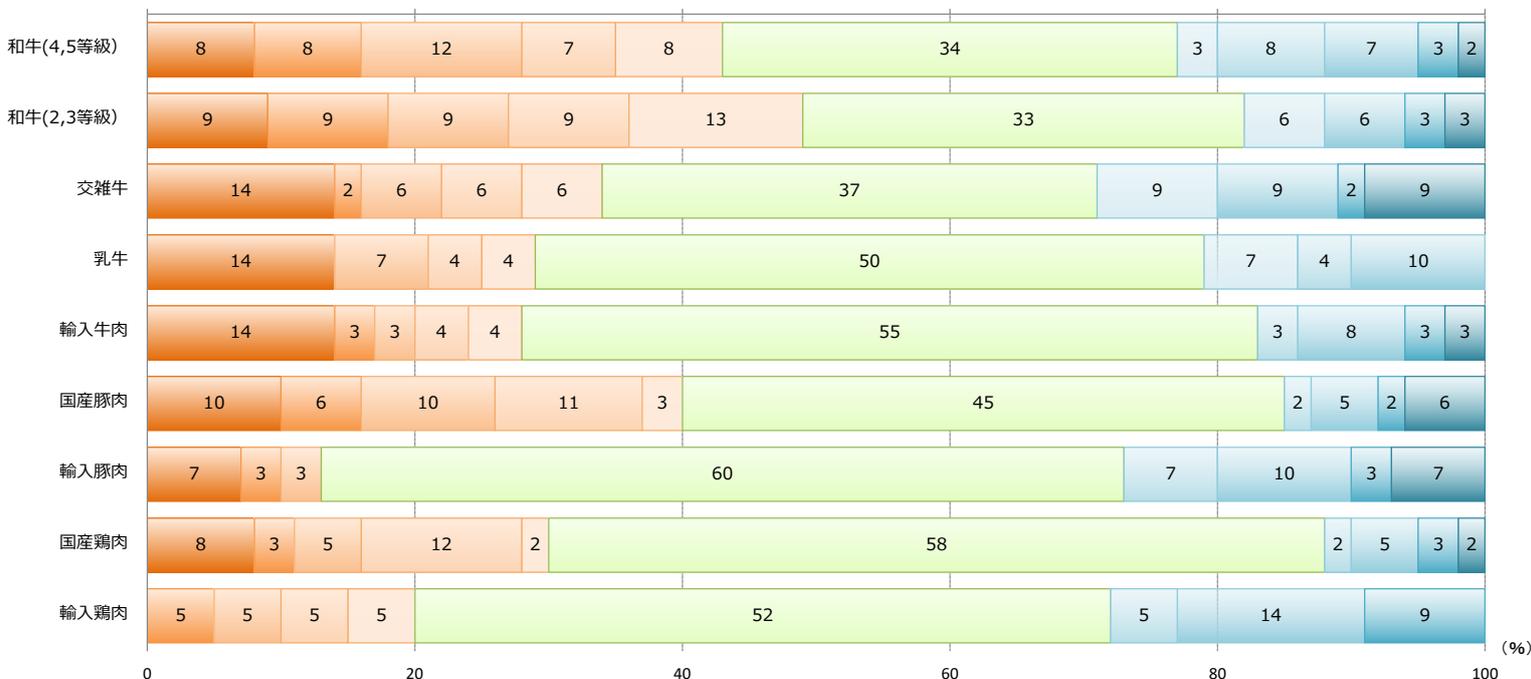
○和牛（4,5等級）の増加理由については、「自粛期間中にまとめ買いが多かった」、「仕入価格低下による販促を実施した」、「家庭内でのバーベキュー、焼肉が増えた」、「新規の客数が増えた」などが挙げられた。

○和牛（2,3等級）では「内食需要拡大による増加」などが挙げられた。このことから**従来から和牛の取扱が多い食肉専門店においても、約半数は等級にかかわらず和牛の取扱を増やす動きがあった**ことがうかがえる。

○一方、**量販店と比較して増加したと答えた割合が大きくなかった理由として、「消費者の低価格志向から、比較的安価な商品を取り扱う量販店へ客足が流れた」との声も挙がった**。

食肉販売量の増減割合（食肉専門店）

■ +30%以上 ■ +20%台 ■ +10%台 ■ +5～9% ■ +5%未満 ■ 変わらない ■ ▲5%未満 ■ ▲5～9% ■ ▲10%台 ■ ▲20%台 ■ ▲30%以上

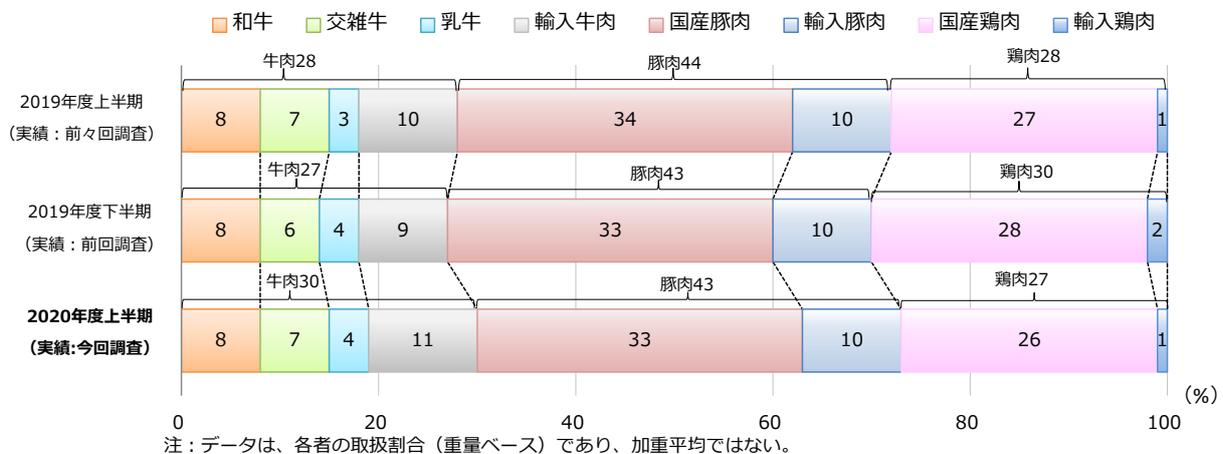


食肉の取扱割合（量販店）

～牛肉の割合が増加した結果、豚肉および鶏肉が減少した～

- 2020年度上半期の量販店における食肉取扱割合の実績（重量ベース）は、**牛肉が30%、豚肉が43%、鶏肉が27%**となった。
- 2019年度上半期実績と比較すると、豚肉および鶏肉がそれぞれ1ポイント減少した一方、牛肉が2ポイント増加した。
- なお、取扱量の増減（13ページ）に加え、総務省の家計調査によると、2020年2月以降、牛肉・豚肉・鶏肉の全てにおいて購入数量・金額ともに前年を上回って推移しており、量販店においては、豚肉・鶏肉の取扱量が増加する以上に、牛肉の取扱量も増加したとみられる。

最近の食肉の取扱割合（量販店）

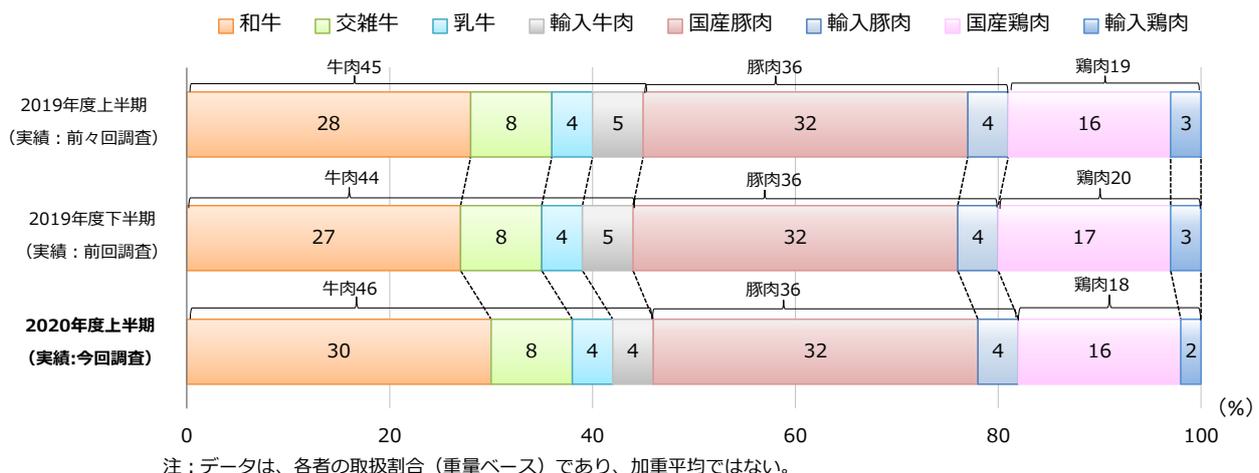


食肉の取扱割合（食肉専門店）

～牛肉の割合が増加した結果、鶏肉が減少した～

- 2020年度上半期の食肉専門店における食肉取扱割合の実績（重量ベース）は、**牛肉が46%、豚肉が36%、鶏肉が18%**となった。食肉専門店は、量販店と比べて和牛の取扱割合が高く、輸入食肉の取扱割合が低いことが特徴である。
- 2019年度上半期実績と比較すると、鶏肉が1ポイント減少した一方、牛肉が1ポイント増加した。
- 専門店でも量販店と同様に、取扱量や家計消費と照らすと、全ての食肉で取扱量は増加しているとみられる。

最近の食肉の取扱割合（食肉専門店）

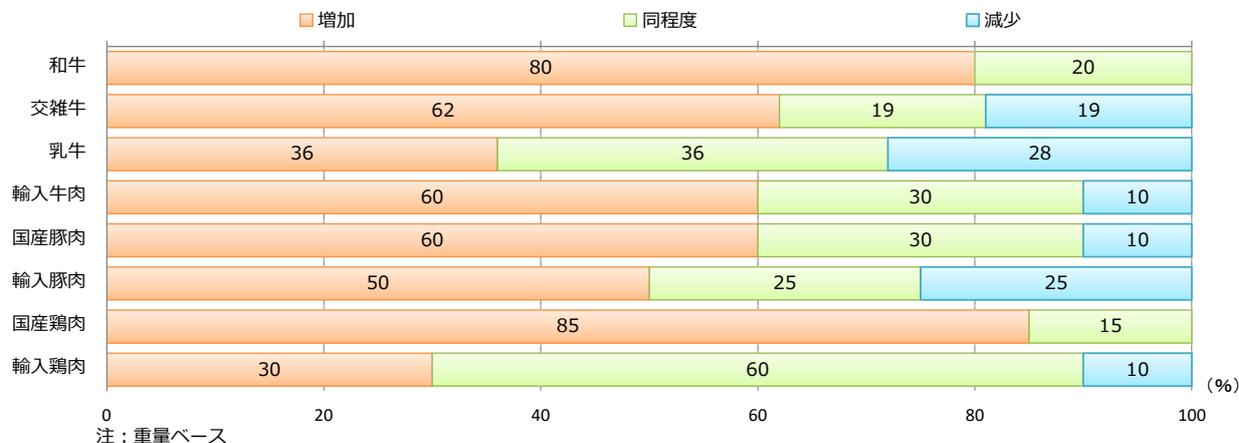


食肉の販売見通し（量販店）

～おおむね増加見通し～

- 2019年度下半期と比較した2020年度下半期の量販店における食肉販売見通し（重量ベース）については、**乳牛および輸入鶏肉以外の食肉で「増加」が最も多くなっており、COVID-19の影響による内食需要の増加を取り込み、食肉販売は全体的に増加の見通しとなっている。**
- 国産鶏肉の増加割合が高い理由として「消費者の低価格志向」が最も多く、次いで「COVID-19の影響による内食需要の増加」、「他畜種からの需要シフト」、「特売回数の増加」が多く挙げられた。
- 和牛、交雑牛の増加割合が高い理由として「仕入価格低下分の価格引き下げ」などが挙げられた。
- 乳牛、輸入豚肉の減少割合が高い理由として「他畜種への需要シフト」が挙げられた。

2020年度下半期の食肉販売見通し（量販店）

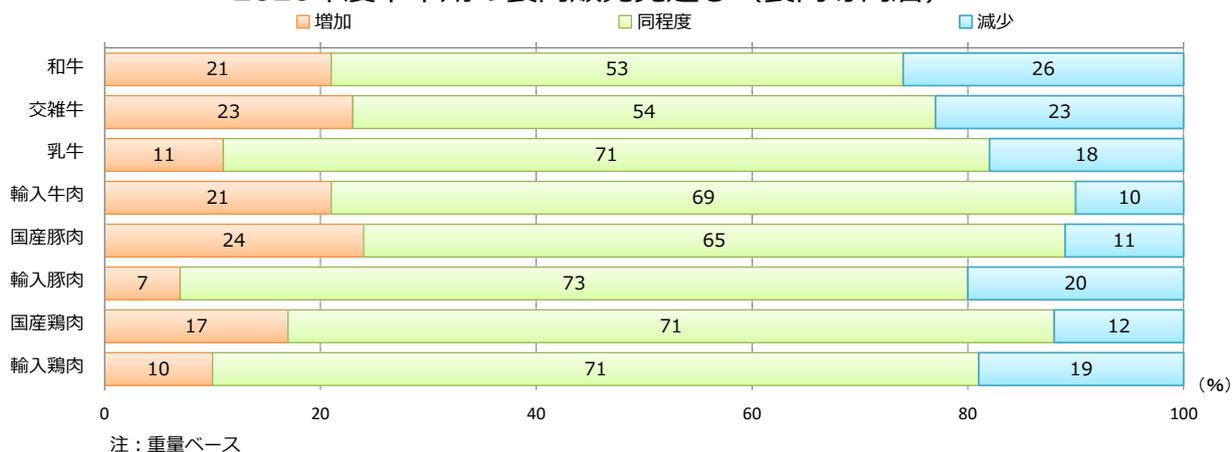


食肉の販売見通し（食肉専門店）

～全ての食肉で「同程度」が最も多い見通し～

- 2019年度下半期と比較した2020年度下半期の食肉専門店における食肉販売見通し（重量ベース）については、**全ての食肉で「同程度」が最も多く、全体的に販売量の増加を見込む量販店とは対照的な結果となった。**
- 輸入牛肉、国産豚肉、国産鶏肉の増加割合が高い理由として「消費者の低価格志向」が多く挙げられた。
- 和牛、交雑牛、乳牛の減少割合が高い理由としては「消費者の低価格志向」や「COVID-19の影響による景気の停滞」が挙げられた。

2020年度下半期の食肉販売見通し（食肉専門店）

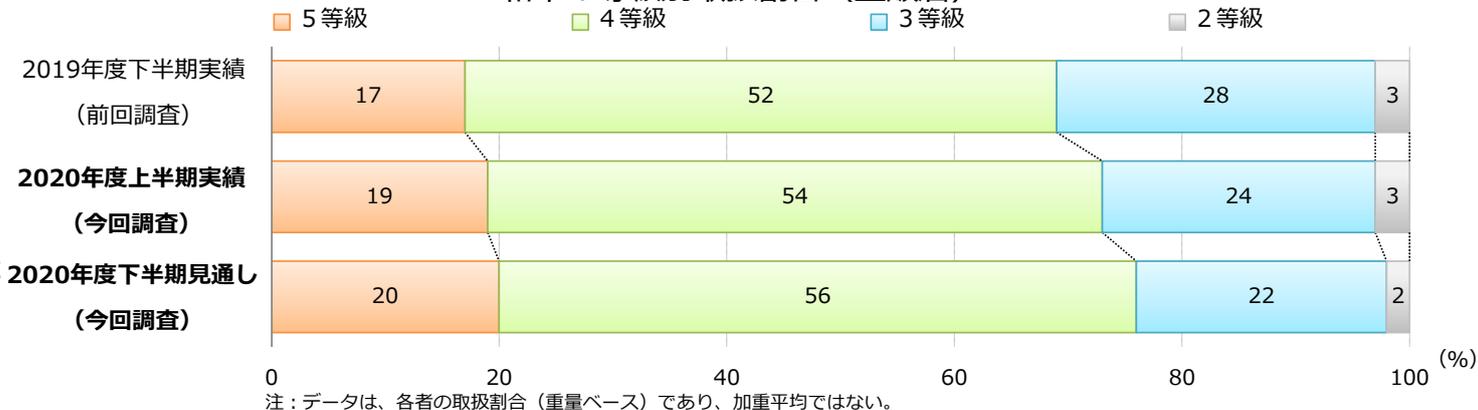


取扱割合（量販店）

～ 量販店では4等級の割合が過半を占める ～

- 2020年度上半期の量販店における和牛の等級別取扱割合の実績（重量ベース）については、**4等級が54%と最も多く、次いで、3等級が24%、5等級が19%、2等級が3%**となった。
- 2020年度下半期の量販店における和牛の等級別取扱割合の見通し（重量ベース）については、**4等級が56%と最も多く、次いで、3等級が22%、5等級が20%、2等級が2%**となり、2019年度下半期と比べて3等級が6ポイント、2等級が1ポイントそれぞれ減少する一方、4等級が4ポイント、5等級の割合が3ポイントそれぞれ増加する見通しとなった。
- 主な部位として4等級は「かたロース」が最も多く、次いで「リブロース・サーロイン」、「ばら」であった。なお、前回調査では4等級の主な部位としては「かた」が最も多く、次いで「もも」「サーロイン」であった。このことから、**量販店において比較的高価な部位の取扱を増加させる動きがあるとみられる。**

和牛の等級別取扱割合（量販店）

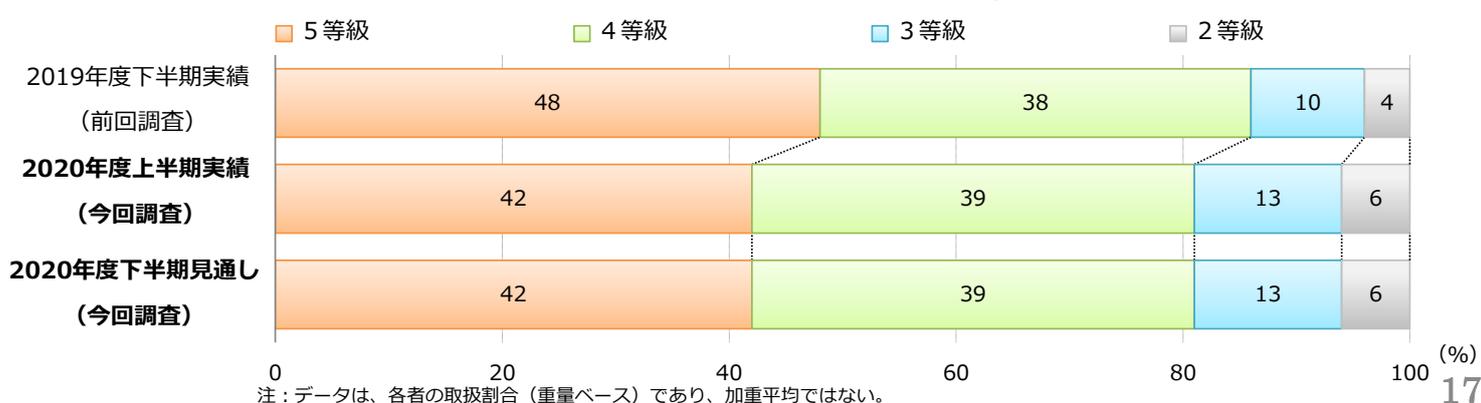


取扱割合（食肉専門店）

～ 食肉専門店では5等級の割合が約4割を占める ～

- 2020年度上半期の食肉専門店における和牛の等級別取扱割合の実績（重量ベース）については、**5等級が42%と最も多く、次いで、4等級が39%、3等級が13%、2等級が6%**となった。
- 2020年度下半期の食肉専門店における和牛の等級別取扱割合の見通し（重量ベース）については、**5等級が42%と最も多く、次いで、4等級が39%、3等級が13%、2等級が6%**となり、2019年度下半期と比べて5等級が6ポイント減少する一方、3等級が3ポイント、2等級が2ポイント、4等級が1ポイントずつ増加する見通しとなった。
- 主な部位として5等級は「リブロース・サーロイン」、4および3等級は「もも」が最も多かった。

和牛の等級別取扱割合（食肉専門店）



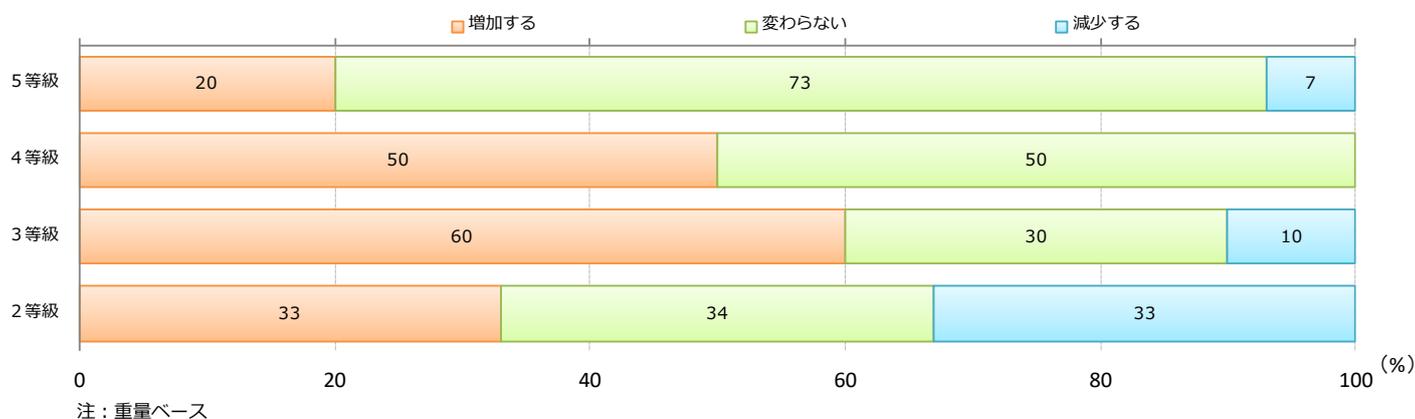
販売見通し（量販店）

～3等級、4等級が増加する見通し～

○2019年度下半期と比較した2020年度下半期の量販店における和牛の等級別販売見通しについては、**5等級は「変わらない」が最も多く、また「増加する」が「減少する」を上回った。4等級は「増加」と「変わらない」が同水準となり、「減少する」の回答はなかった。3等級は「増加する」が60%と最も多く、次いで、「変わらない」が30%、「減少する」が10%となった。**2等級は「増加」と「減少」および「変わらない」が同水準となった。

○5等級の増加理由としては「外食向け需要の減少」、「相場安」、「小売向け需要の増加」が挙げられ、3等級および4等級の増加理由として「小売向け需要の増加」などが挙げられた。

2020年度下半期の和牛の等級別販売見通し（量販店）



販売見通し（食肉専門店）

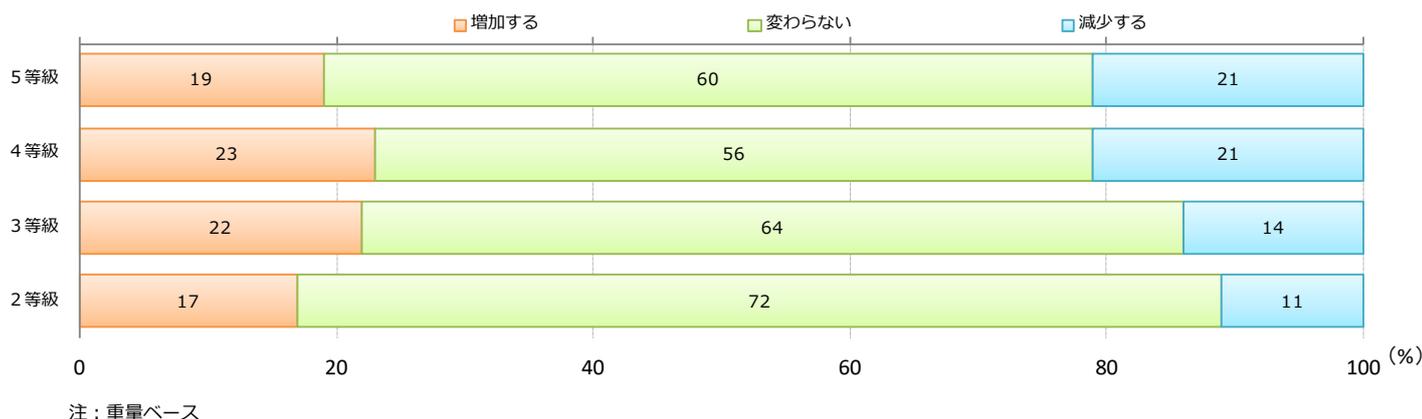
～ おおむね現状維持の見通し～

○2019年度下半期と比較した2020年度下半期の食肉専門店における和牛の等級別販売見通しについては、**全ての等級で「変わらない」が最も多い中、5等級は「減少する」が「増加する」を上回った一方、2等級、3等級および4等級では「増加する」が「減少する」を上回った。**

○増加理由として4等級は「内食需要の増加」、2等級および3等級は「消費者の赤身志向による5等級からのシフト」が多く挙げられた。

○減少理由として全ての部位で「景気の停滞」が多く挙げられた。

2020年度下半期の和牛の等級別販売見通し（食肉専門店）



通常価格（量販店）

～和牛は値下げ傾向に～

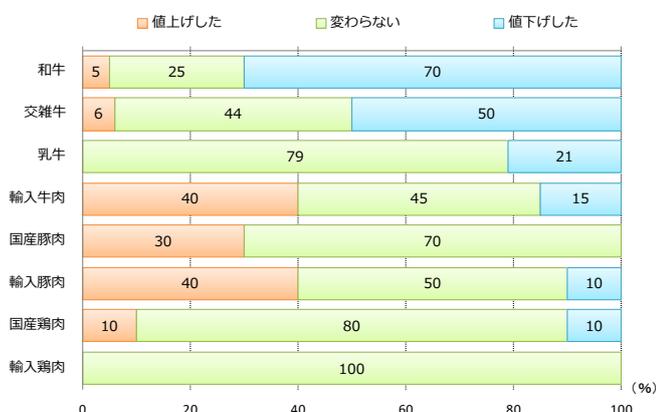
○2019年度上半期と比較した2020年度上半期の量販店における小売価格の実績については、**和牛および交雑牛で「値下げした」が最も多かった**。また、和牛、交雑牛以外の食肉で「変わらない」が最も多い中、**輸入牛肉、国産豚肉、輸入豚肉では「値上げした」が「値下げした」を上回った**。

○2019年度下半期と比較した2020年度下半期の量販店における小売価格の見通しについては、**和牛と交雑牛では、値上げするとの回答はなかった**。また、**和牛以外の食肉では「変わらない」が最も多い中、和牛においては約半数が値下げすると回答した**。交雑牛、輸入牛肉、輸入豚肉は「値下げする」が「値上げする」を上回った。一方、国産豚肉、国産鶏肉は「値上げする」が「値下げする」を上回った。

食肉の小売価格（量販店）

2020年度上半期の小売価格（実績）

2020年度下半期の小売価格（見通し）



通常価格（食肉専門店）

～全ての食肉で据え置き傾向に～

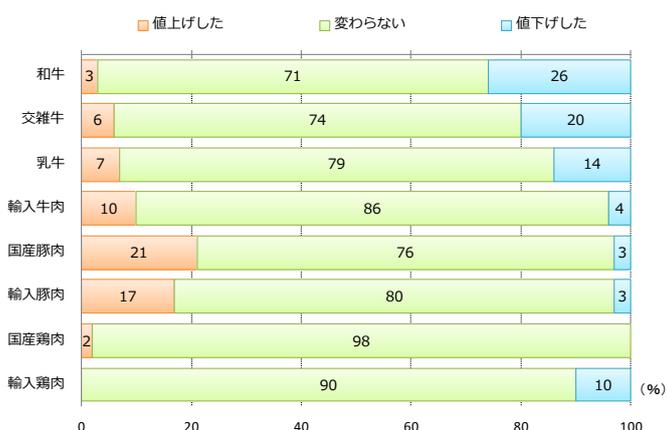
○2019年度上半期と比較した2020年度上半期の食肉専門店における小売価格の実績については、**全ての食肉で「変わらない」が最も多い中、和牛、交雑牛、乳牛および輸入鶏肉は「値下げした」が「値上げした」を上回った**。

○2019年度下半期と比較した2020年度下半期の食肉専門店における小売価格の見通しについては、**全ての食肉で「変わらない」が最も多い中、和牛、乳牛、輸入牛肉、国産豚肉および国産鶏肉ではわずかであるが「値上げする」が「値下げする」を上回った**。上半期の実績と比較すると、和牛、交雑牛、乳牛は「値下げする」の割合が減少している。

食肉の小売価格（食肉専門店）

2020年度上半期の小売価格（実績）

2020年度下半期の小売価格（見通し）

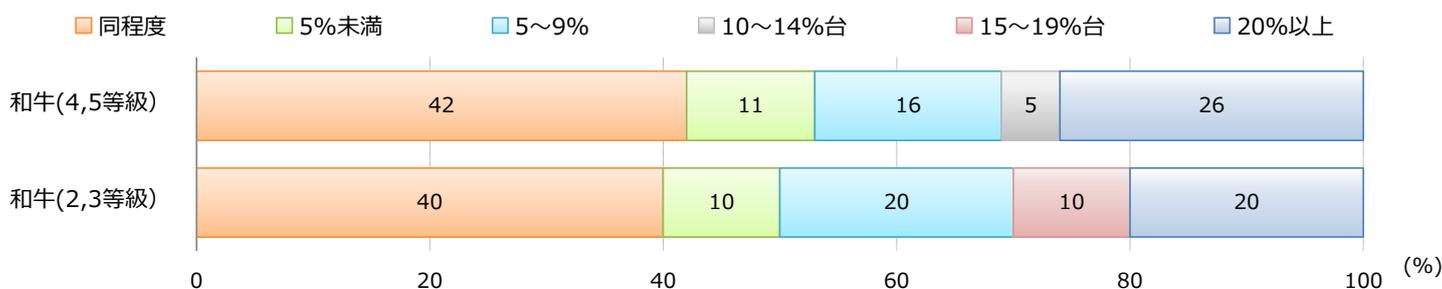


特売価格低下割合（量販店、6月）

～「同程度」が最も多い～

- 2020年度上半期にかけて卸売価格が大きく低下した和牛について、2019年度上半期と比較した2020年度上半期の量販店における**4,5等級の特売価格の低下割合は、程度にかかわらず「値下げした」と回答した者が全体の58%を占めた。全体のうち「20%以上」値下げした割合が26%、「5～9%」値下げした割合が16%となった。**枝肉価格が大幅に低下する中（参考：東京食肉市場和牛去勢6月の枝肉価格（円/kg）前年同期比 A-5：82.6%、A-4：77.2%）、特売価格を大きく下げた回答は比較的多く見られた。
- 2,3等級の特売価格の低下割合についても「値下げした」と回答したものが60%を占めた。全体のうち「5～9%」の値下げが20%、「20%以上」の値下げが20%となった。**枝肉価格が大幅に低下する中（参考：東京食肉市場和牛去勢6月の枝肉価格（円/kg）前年同期比 A-3：74.6%、A-2：73.8%）特売価格を大きく下げた回答は比較的多く見られた。

和牛の特売価格の低下割合（量販店、6月）

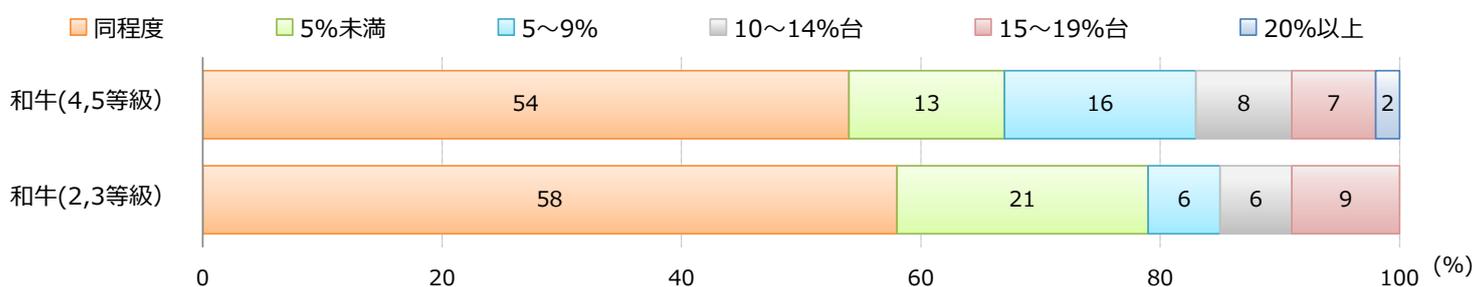


特売価格低下割合（食肉専門店、6月）

～「同程度」が最も多い～

- 2019年度上半期と比較した2020年度上半期の食肉専門店における**4,5等級の特売価格の低下割合は、46%が「値下げした」と回答した。全体のうち「5～9%」の値下げが16%、「5%未満」の値下げが13%となった。**枝肉価格が大幅に低下する中、量販店と比べて特売価格を据え置きにした店舗が多かった。
- 2,3等級の特売価格の低下割合は、42%が「値下げした」と回答した。全体のうち「5%未満」の値下げが21%、次いで「15～19%台」の値下げが9%となった。**枝肉価格が大幅に低下する中、4,5等級よりも特売価格を据え置きにした店舗が多かった。

和牛の特売価格の低下割合（食肉専門店、6月）

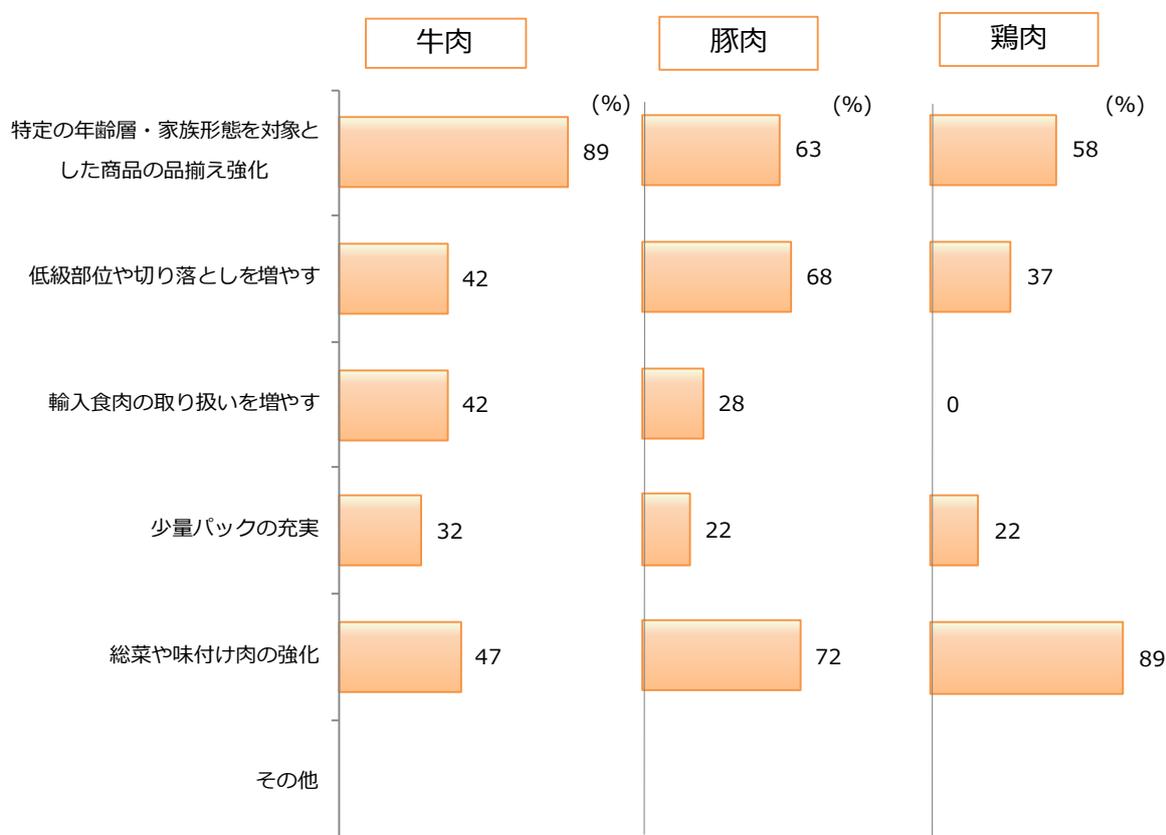


量販店

～豚肉・鶏肉は「総菜や味付け肉の強化」が1位～

- 量販店における販売拡大に向けた対応については、**牛肉**では**1位**が「**特定の年齢層・家族形態を対象とした商品の品揃え強化**」、2位が「総菜や味付け肉の強化」3位が「低級部位や切り落としを増やす」および「輸入食肉の取り扱いを増やす」となった。
- 豚肉**では**1位**が「**総菜や味付け肉の強化**」、2位が「低級部位や切り落としを増やす」、3位が「特定の年齢層・家族形態を対象とした商品の品揃え強化」となった。
- 鶏肉**では**1位**が「**総菜や味付け肉の強化**」、2位が「特定の年齢層・家族形態を対象とした商品の品揃え強化」、3位が「低級部位や切り落としを増やす」となった。
- 豚肉および鶏肉において、「総菜や味付け肉の強化」という回答が多く、テーブルミート向けのさらなる拡大に向けて、時短・簡便商品の取り扱いを増やしていることがうかがえる。
- 販売拡大に向けた具体的な対応として「**切り落とし等の頻度品（低価格）から家で楽しめるご馳走メニュー（高価格）までの幅広いラインナップ**に取り組む」、「味付け商材のニーズの高まりから売場拡大と新規商品を導入し品揃えを拡充させる」、「**三密回避の買い物傾向から、大型パックを強化する**」などが挙げられた。

販売拡大に向けた対応（量販店）



注：複数回答

食肉専門店

～牛肉・豚肉は「低級部位や切り落としを増やす」が1位～

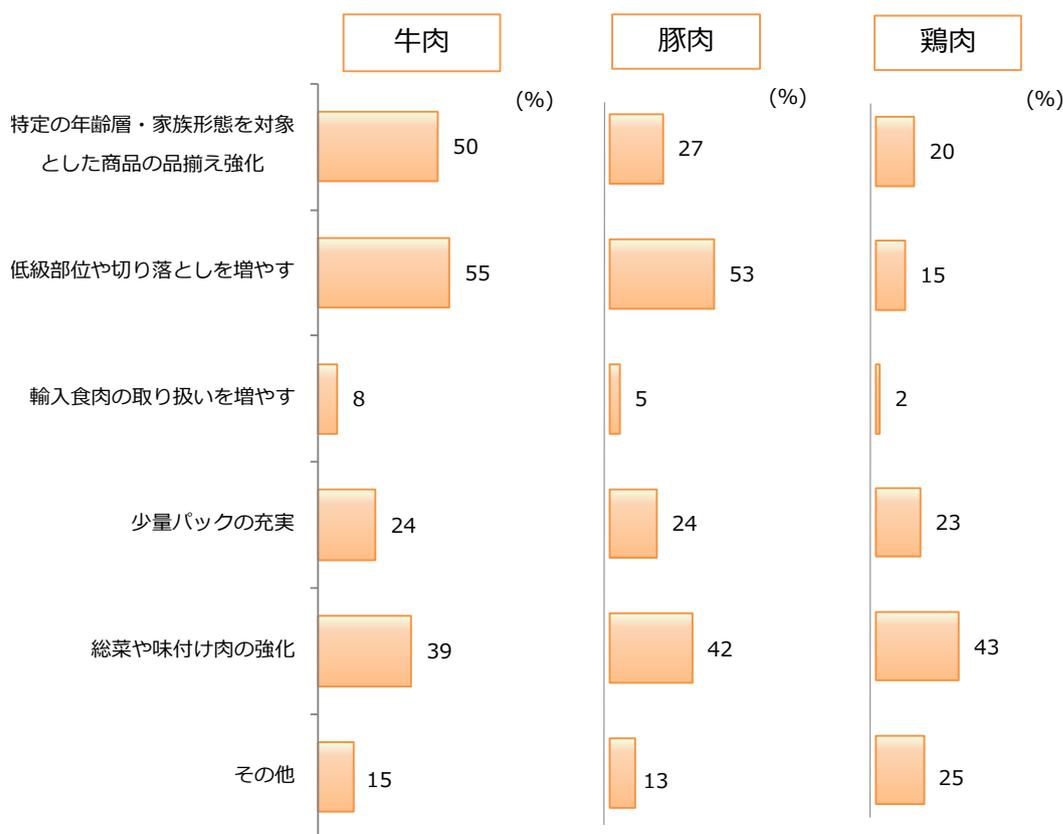
○食肉専門店における販売拡大に向けた対応については、**牛肉**では**1位が「低級部位や切り落としを増やす」**、2位が「特定の年齢層・家族形態を対象とした商品の品揃え強化」、3位が「総菜や味付け肉の強化」となった。特に、食肉専門店では和牛が主力商品であることから、消費者が求めやすい低価格の部位や切り落としの取り扱いを引き続き強化していることがうかがえる。

○**豚肉**では**1位が「低級部位や切り落としを増やす」**、2位が「総菜や味付け肉の強化」、3位が「特定の年齢層・家族形態を対象とした商品の品揃え強化」となった。

○**鶏肉**では**1位が「総菜や味付け肉の強化」**、2位が「その他」となり、「食べ方の提案」、「小割カット対応」、「真空パックでの提供」などが挙げられた。3位は「少量パックの充実」となった。

○販売拡大に向けた具体的な対応として「牛スジ煮込みなど家庭では料理しないアイテムを充実させる」、「**少人数用のBBQセットを販売していく**」、「**個食化に対応し、高級部位のスライスを1枚でも購入できる敷居の低さを演出する**」などが挙げられた。

販売拡大に向けた対応（食肉専門店）



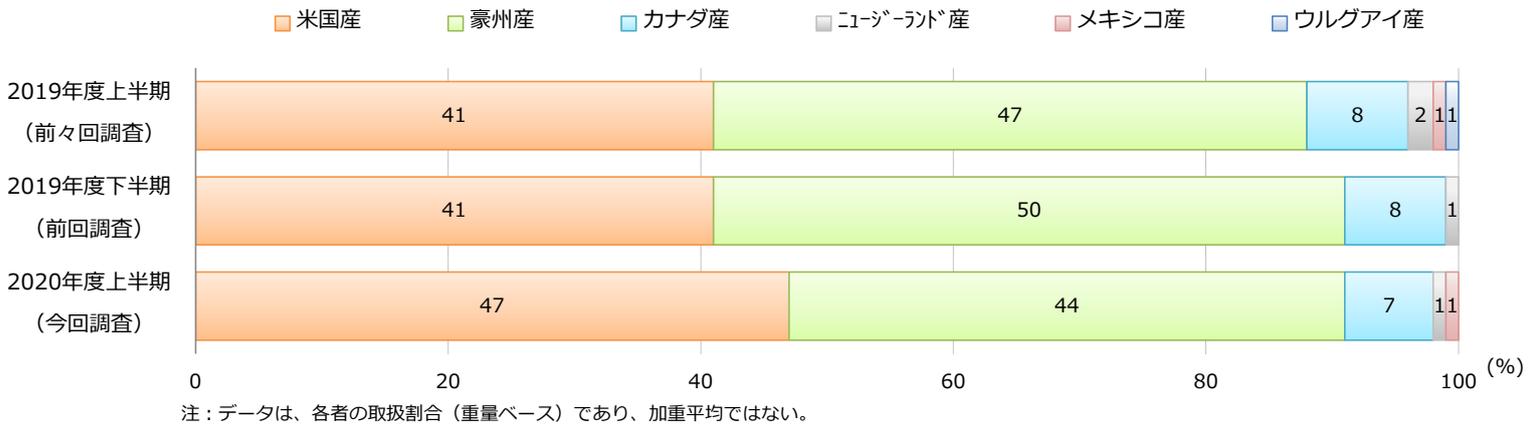
注：複数回答

輸入牛肉の取扱割合（量販店）

～米国産が最も多い～

- 2020年度上半期の量販店における輸入牛肉の取扱割合は「**米国産**」が**47%**と最も多く、**次いで「豪州産」が44%**と**米国産が豪州産を上回った**。以下「カナダ産」が7%「ニュージーランド産」および「メキシコ産」が1%となった。
- 2019年度上半期の取扱割合と比べると「豪州産」が3ポイント減少した一方、「米国産」が6ポイント増加した。
- 豪州産の減少の背景には「豪州における生産量の減少による価格の高騰」が挙げられた。

輸入牛肉の取扱割合（量販店）

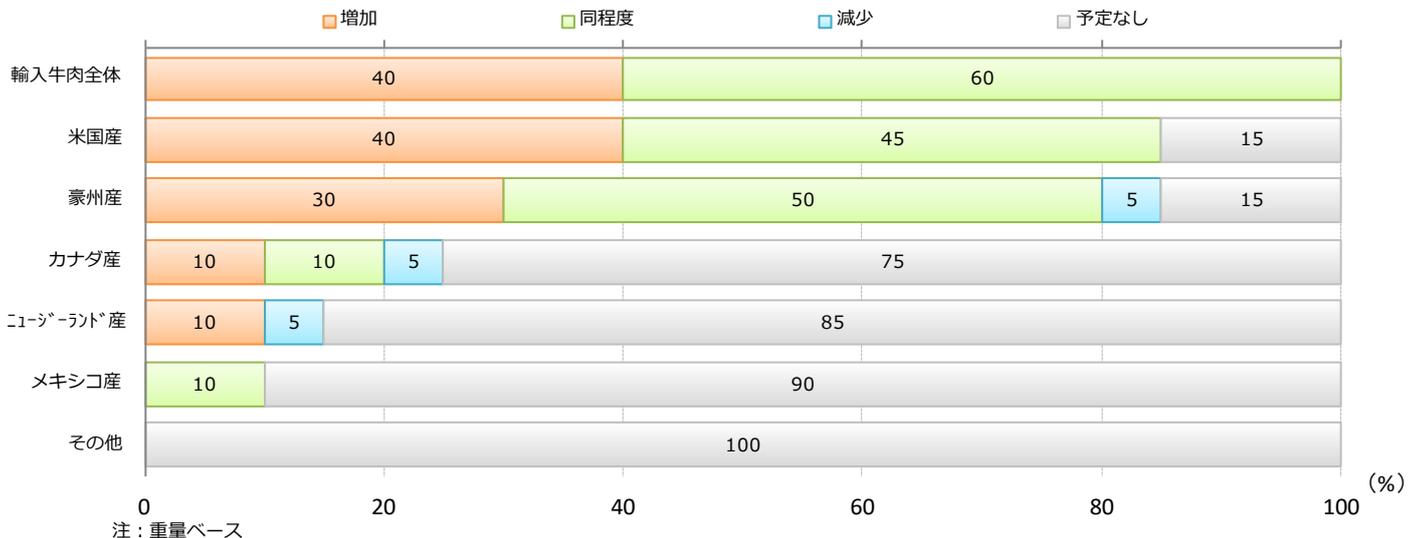


輸入牛肉の取扱見通し（量販店）

～米国産、豪州産は増加または同程度の見通し～

- 今後1年間の量販店における輸入牛肉の取扱見通しについては、**輸入牛肉全体および米国産では「減少」との回答はなく「増加」がそれぞれ40%**となった。
- 国別に見ると、**米国産および豪州産で「同程度」がそれぞれ45%、50%**と最も多く、**次いで「増加」がそれぞれ40%、30%**と多かった。
- 米国産および豪州産の増加割合が高い理由として「巣ごもり需要により輸入牛肉の売上が伸びているので、焼き肉、ステーキ商材を中心に販売を拡大していく」などが挙げられた。

今後1年間の輸入牛肉の取扱見通し（量販店）

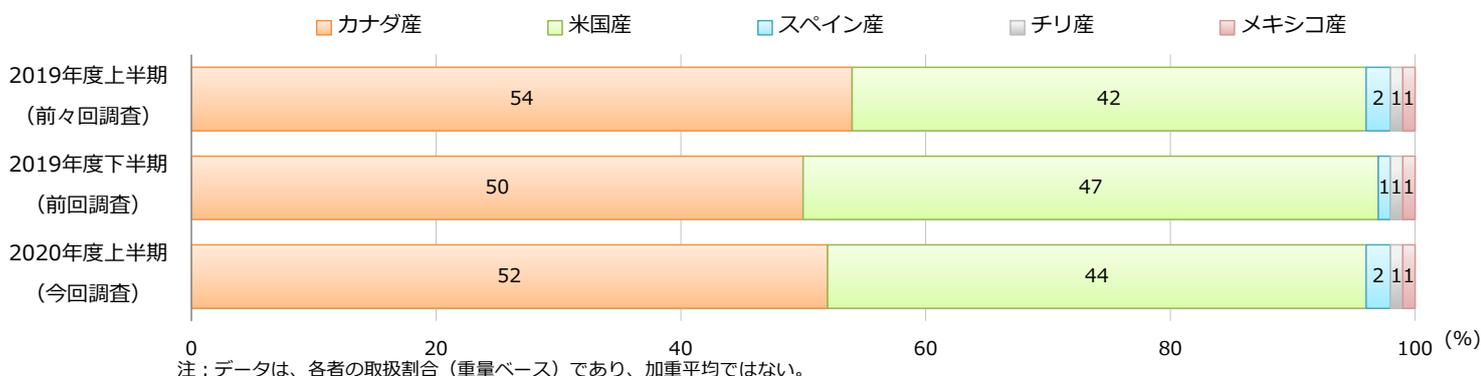


輸入豚肉の取扱割合実績（量販店）

～カナダ産が最も多い～

- 2020年度上半期の量販店における輸入豚肉の取扱割合は「**カナダ産**」が**52%**と最も多く、次いで「**米国産**」が**44%**、以下「スペイン産」が2%、「チリ産」が1%、「メキシコ産」が1%であった。
- 2019年度上半期の取扱割合と比べると「カナダ産」が2ポイント減少した一方、「米国産」が2ポイント増加した。
- 卸売業者の輸入豚肉取扱状況（8ページ）では「輸入豚肉は減少した」との回答が多かったが、量販店においては「緊急事態宣言による外出自粛に伴う食品まとめ買い需要に備え特に輸入原料商品を手当した」との声も挙がった。

輸入豚肉の取扱割合（量販店）

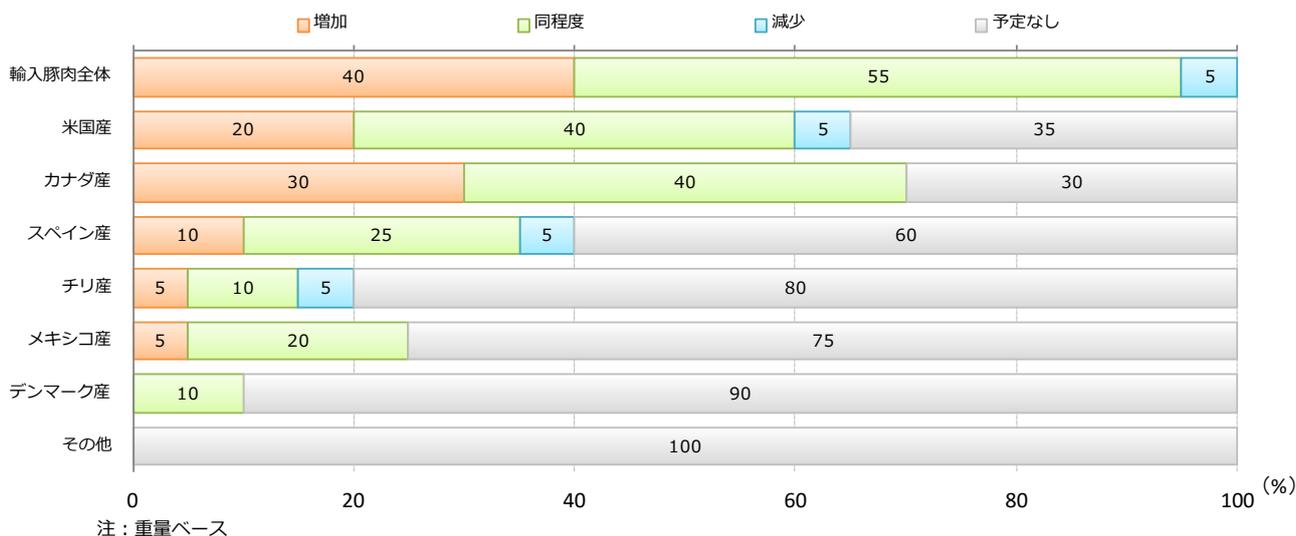


輸入豚肉の取扱見通し（量販店）

～米国産、カナダ産を中心に増加する見通し～

- 今後1年間の量販店における輸入豚肉の取扱見通しについては、輸入豚肉全体では「**同程度**」が**55%**と最も多く、次いで「**増加**」が**40%**となった。
- 国別に見ると、米国産、カナダ産では「同程度」が最も多く、次いで「増加」がそれぞれ20%、30%と多くなっている。
- 米国産およびカナダ産の増加割合が高い理由として「引き続きまとめ買い需要に対応するため仕入を強化する」などが挙げられた。

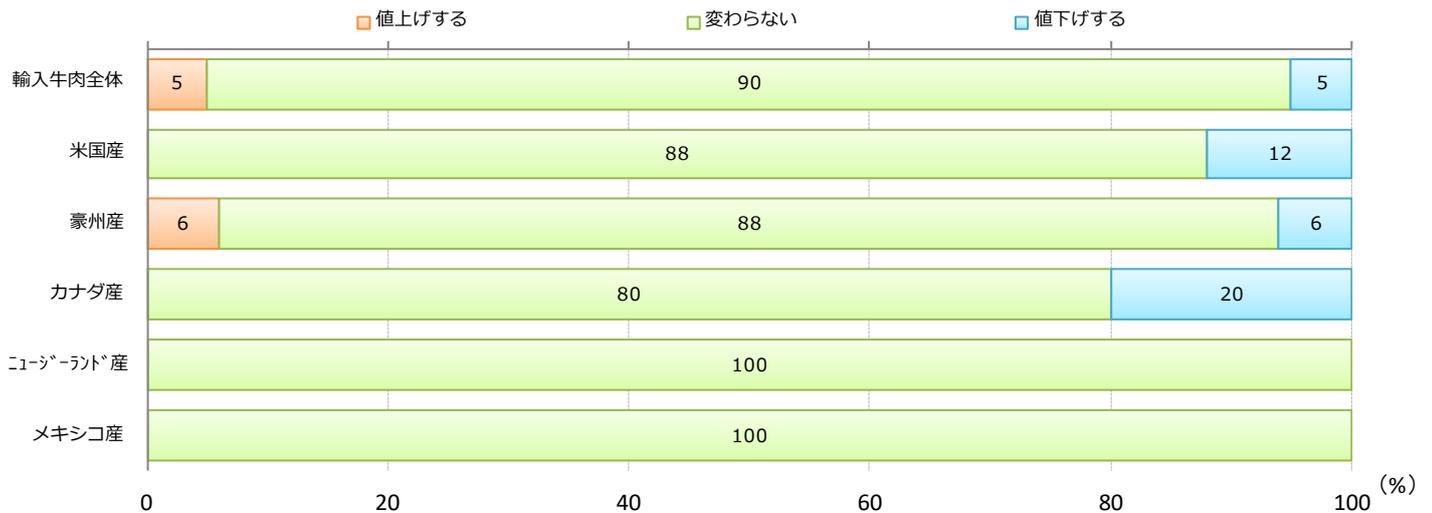
今後1年間の輸入豚肉の取扱見通し（量販店）



輸入牛肉の販売価格見通し（量販店） ～販売価格は変わらない見通し～

- 今後1年間の量販店における輸入牛肉の販売価格の見通しについては、**輸入牛肉全体では「変わらない」が90%と最も多かった。**
- 国別に見ても、全ての国で「変わらない」が最も多かった。また、米国産およびカナダ産は「値下げする」が「値上げする」を上回った。

今後1年間の輸入牛肉の販売価格見通し（量販店）



輸入豚肉の販売価格見通し（量販店） ～販売価格は変わらない見通し～

- 今後1年間の量販店における輸入豚肉の販売価格の見通しについては、**輸入豚肉全体では「変わらない」が90%と最も多くなった。**
- 国別に見ても、全ての国において「変わらない」が最も多い結果となった。

今後1年間の輸入豚肉の販売価格見通し（量販店）

